

福山市がめざす学びを実現する 学校教育環境の在り方について

－ すべてのこどもたちが、自分自身の成長を実感できる
学校教育の実現に向けて －

(答申)

目 次

資料 1	福山市のめざす教育	－ 1
資料 2	児童生徒数の現状と将来推計	－ 2
資料 3	福山市立小・中・義務教育学校の位置図	－ 3
資料 4	学校規模の現状と将来推計	－ 4
資料 5	学校施設	－ 7
資料 6	これまでの学校再編の取組	－ 12
資料 7	特別な支援が必要な児童生徒の状況	－ 18
資料 8	教員の状況	－ 20
資料 9	コミュニティ・スクール	－ 21
資料 1 0	義務教育学校の特色	－ 22
資料 1 1	義務教育学校教職員アンケート結果	－ 26

【資料1】 福山市のめざす教育

市 福山みらい創造ビジョン

2021 (R3) → 2025 (R7) 年度

挑戦4 「新たな価値を創出する人材育成と個性光る地域振興」

↳ 4-1 『未来を切り拓く教育』

【目標とする姿】 未来に夢や希望を持ち、自ら学び育っている

教委

第三次福山市教育振興基本計画

2022 (R4) → 2026 (R8) 年度

【めざす姿】

◎だれもが、予測困難な変化を前向きに捉え、よりよい社会を創るために、
自ら主体的に考え行動できること

◎ふるさとに愛着と誇りをもち、ローズマインドを胸に、様々な世界で
活躍すること

基本目標 《学校教育》「学びに向かう力・学び続ける力を育成する学校教育の推進」

↳ 基本施策5 『子どもの学びを支える教育環境の整備』

子ども主体の学びを促し、質の高い教育活動を展開するため、学校規模・配置の
適正化、学校施設・設備の機能の充実など、環境整備に取り組む。

“本市がめざす学びを実現する学校教育環境”の整備

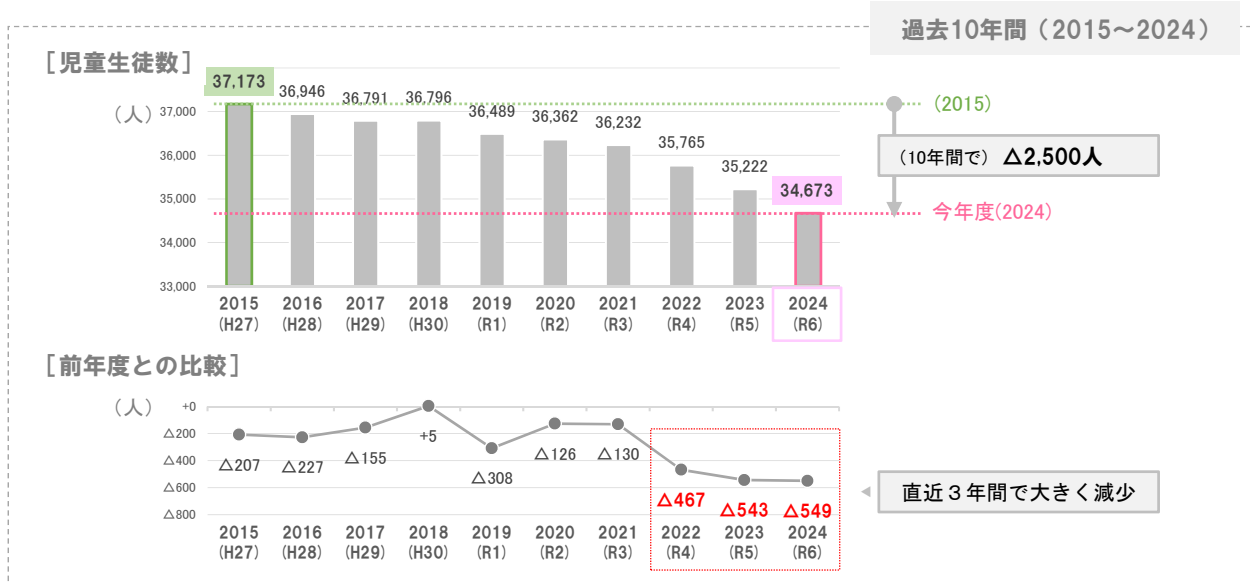
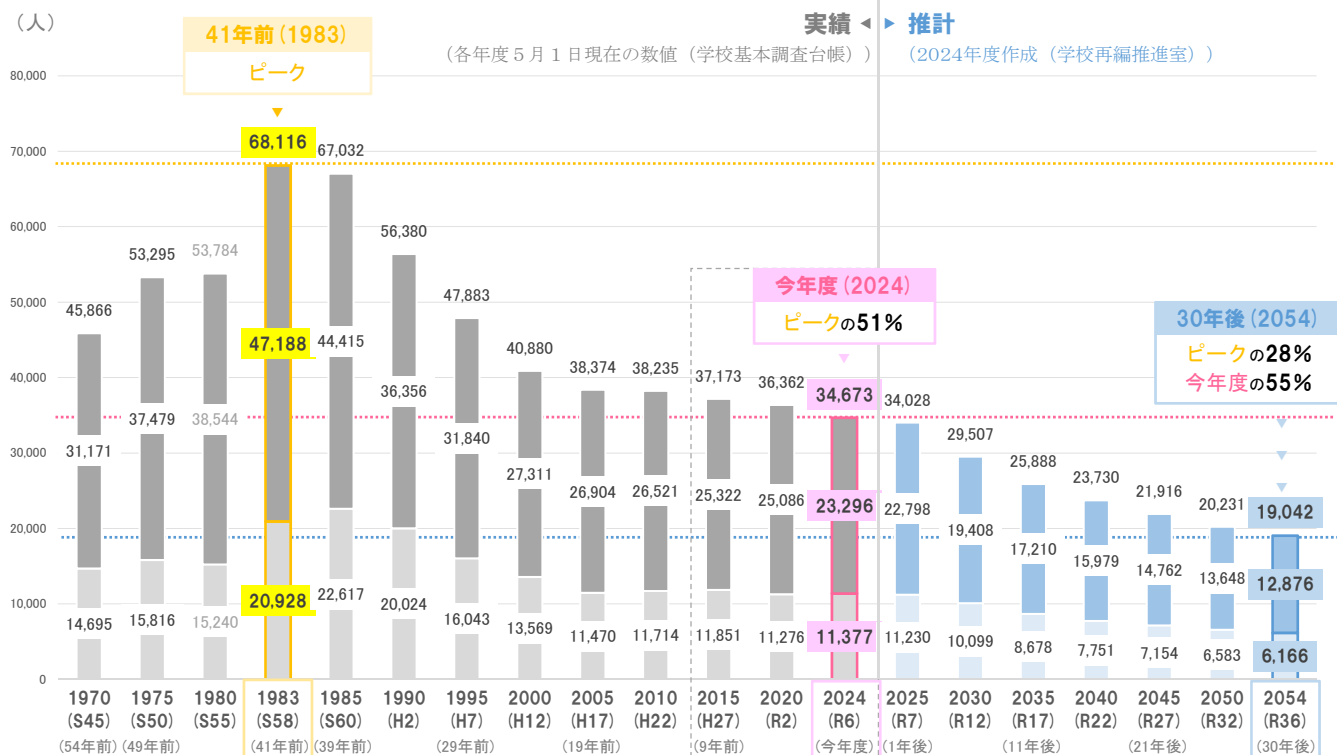
主体的・対話的で深い学び	学びをつくる教職員研修
○ 学力向上支援事業 ◆ 学力定着状況調査・問題データベースを活用した授業改善、個に応じた学び ○ 「学び」の探究パイロット校事業 ◆ 幼保小中接続カリキュラムの編成 ◆ ICT活用の目的・場面・方法を明確化 等 ○ 教職員がやりがいを実感する取組 ♥ 一斉・指定・任意研修等の継続・充実 ○ 教職員の負担軽減につながる取組 ♥ 統合型校務支援システムによる校務のデジタル化 ♥ 補助員等の配置	○ 学習指導要領に立ち返り 教材研究を中心に据えた研修 ◆ 市内一斉研修 ◆ 教科の専門性パワーアップ研修 ◆ 主任・主事研修 ◆ 教職員ニーズ研修 ◆ 福山教育フォーラム 等 ○ 特別支援教育 ◆ アセスメントに基づく指導支援 ○ 不登校児童生徒への支援 ◆ 学校内外の専門機関に繋がる取組 ○ 外国人児童生徒等への支援 ◆ 日本語初期指導教室の開設
元気・笑顔で学び続ける教職員	多様な学びの場の充実
こどもの学びを支える教育環境の整備 ○ 望ましい学校教育環境の整備 ★ 福山市学校教育環境検討委員会の開催 ○ コミュニティ・スクールの導入 ★ 地域とともにある学校づくり	

【資料2】児童生徒数の現状と将来推計

【児童生徒数の推移】

※市町村合併^(*)前の年度：合併後の学校の児童生徒数を積み上げ
(ただし、1980(S55)は、当時の福山市域の学校の児童生徒数)

上段：小学校・義務教育学校前期課程 児童数
下段：中学校・義務教育学校後期課程 生徒数



(*) 市町村合併 1974年：芦田町 1975年：加茂町・駅家町 2003年：内海町・新市町 2005年：沼隈町 2006年：神辺町

【資料3】 福山市立小・中・義務教育学校の位置図

【2025年度（令和7年度）】

- 小学校 70校（うち休校1）
- 中学校 30校
- ◎義務教育学校 2校

計 102校

※下線：再編関連校

※全市を通学区域とする学校

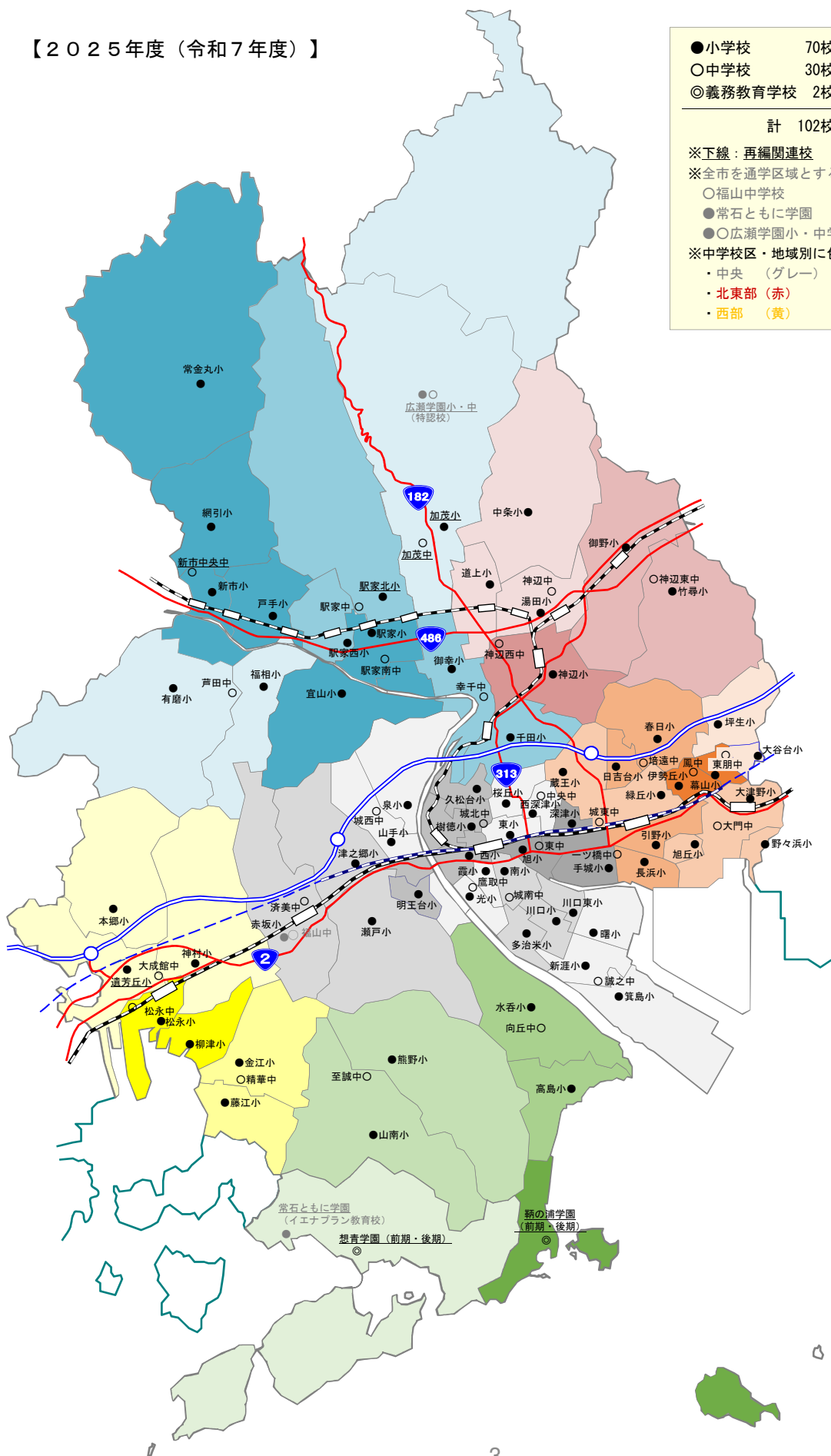
○福山中学校

●常石ともに学園

●○広瀬学園小・中学校

※中学校区・地域別に色分け

- ・中央（グレー）
- ・北部（青）
- ・北東部（赤）
- ・東部（オレンジ）
- ・西部（黄）
- ・南部（緑）



【資料４】学校規模の現状と将来推計

(*) 基本方針で定めた区分

	過小規模	小規模	適正規模	(適正規模)	大規模
小学校	1～5学級 (第1要件)	6～11学級 (第2～3要件)	12～18学級	19～24学級	25学級～
中学校	1～2学級 (第1要件)	3～8学級 (第1～3要件)	9～12学級	13～18学級	19学級～

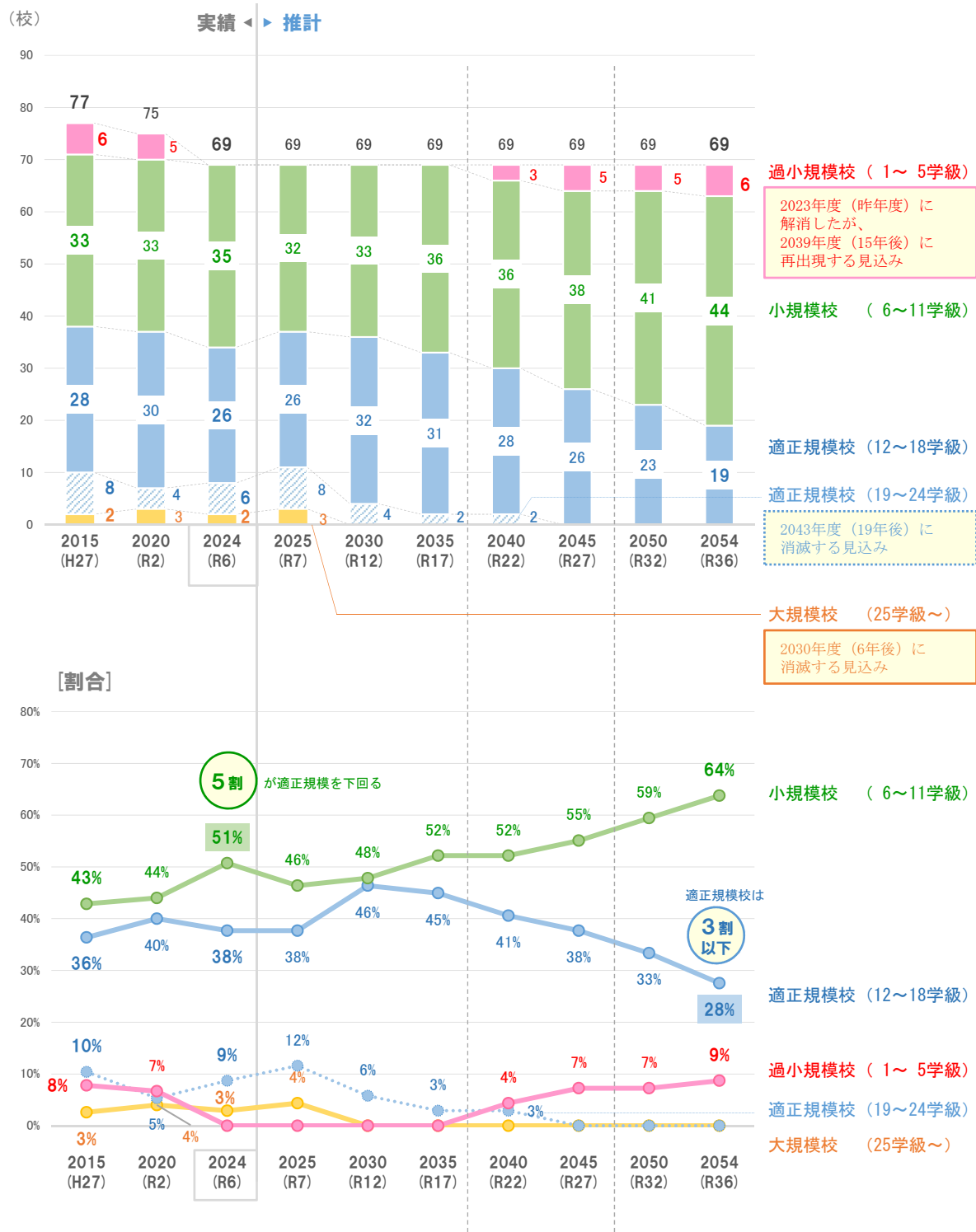
【小学校の学校規模の推移】

※義務教育学校前期課程を含む

※全市を通学区とする学校（広瀬学園小、常石ともに学園）、休校を除く

実績：各年度5月1日現在

推計：2024（R6）年度作成（学校再編推進室）



【資料4】学校規模の現状と将来推計

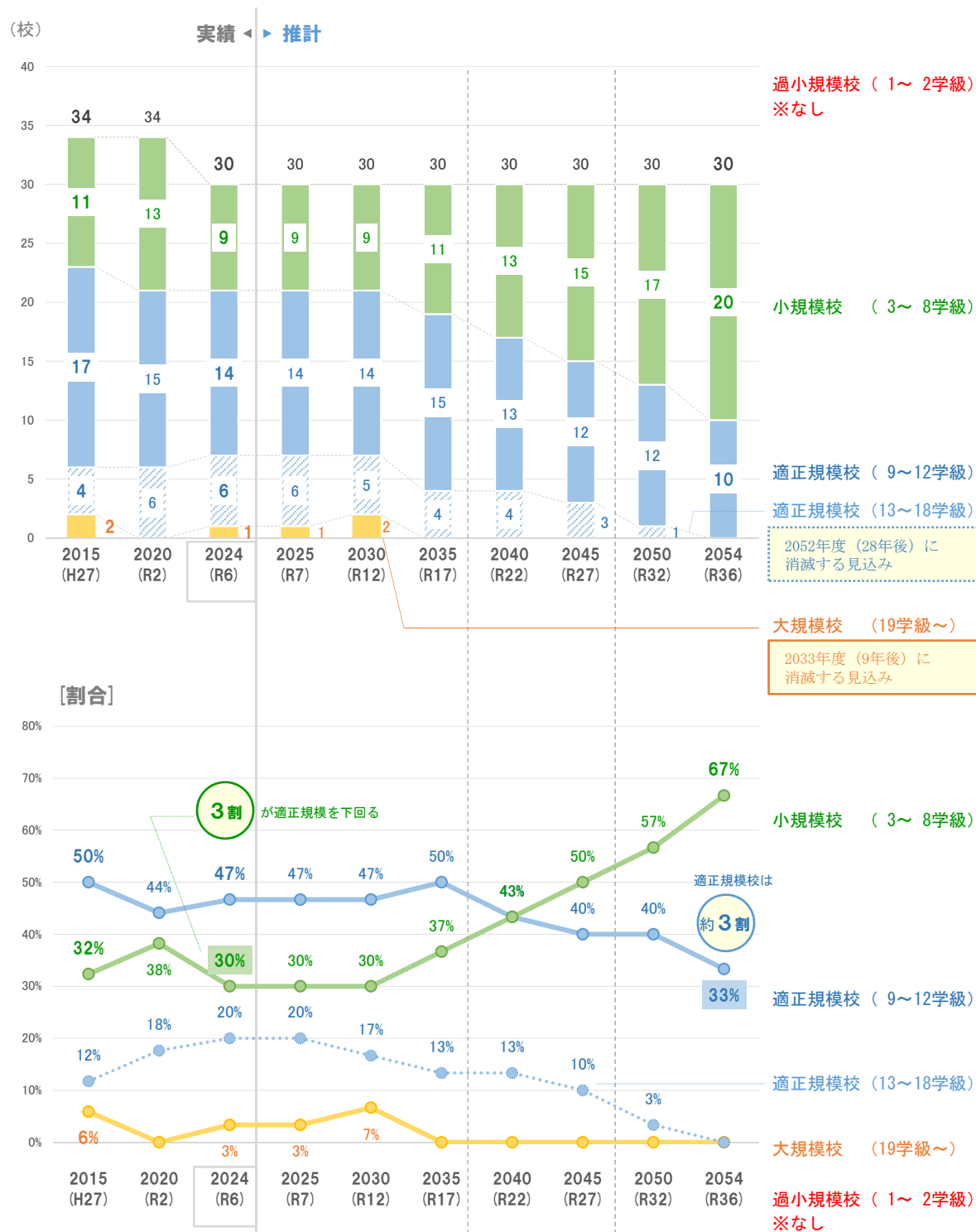
【中学校の学校規模の推移】

※義務教育学校後期課程を含む

※全市を通学区とする学校（福山中、広瀬学園中）を除く

実績：各年度5月1日現在

推計：2024（R6）年度作成（学校再編推進室）

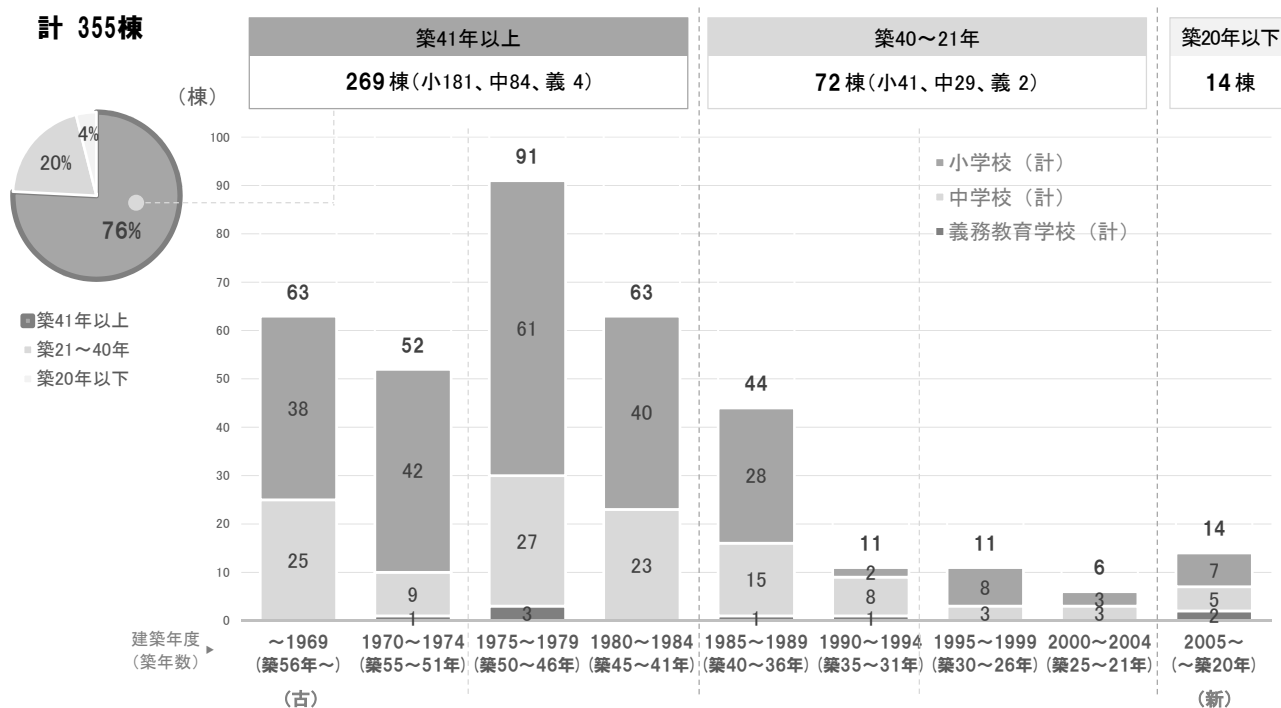


白紙

【資料5】 学校施設の現状

建築経過年数別棟数

【建築経過年数別棟数（校舎・体育館・武道場）】



※築年数は2025年度を基準

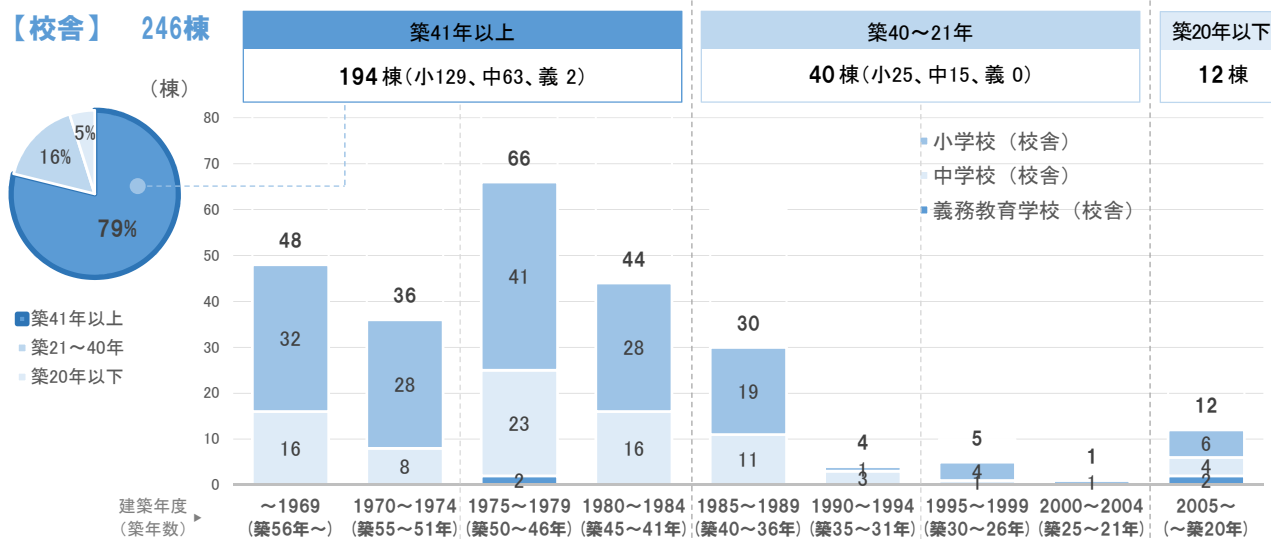
※校舎、体育館、武道場の内訳は次ページ

【資料5】 学校施設の現状

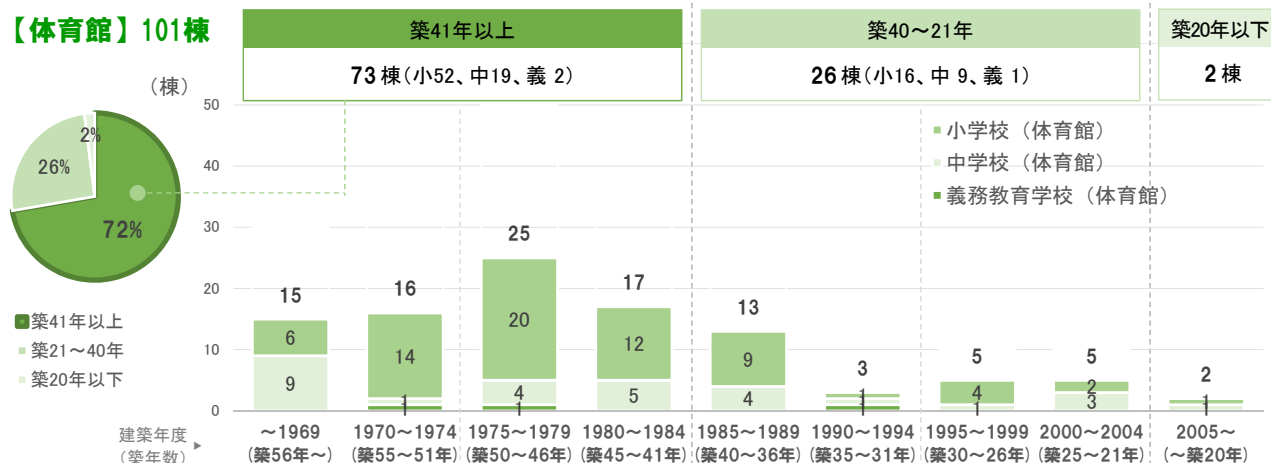
建築経過年数別棟数

(内訳) 校舎・体育館・武道場別

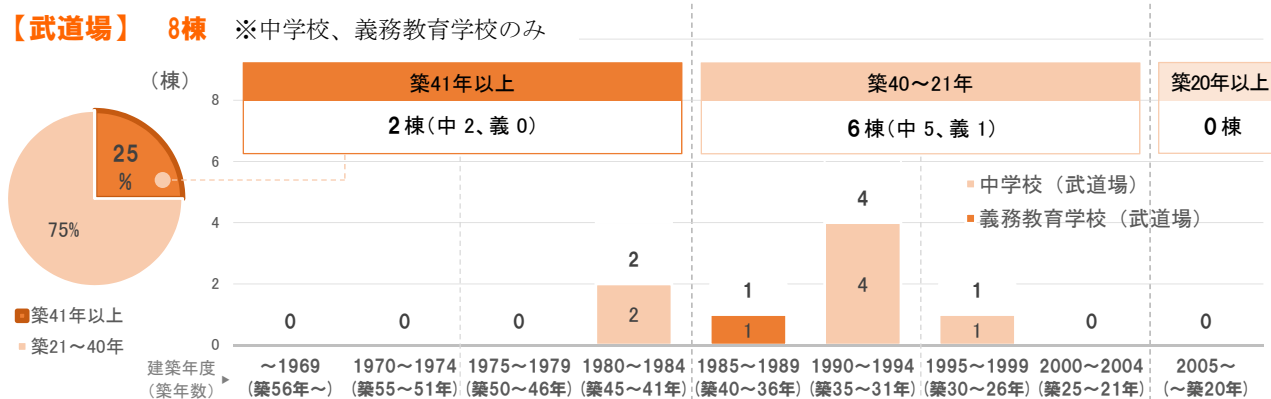
【校舎】 246棟



【体育館】 101棟



【武道場】 8棟 ※中学校、義務教育学校のみ



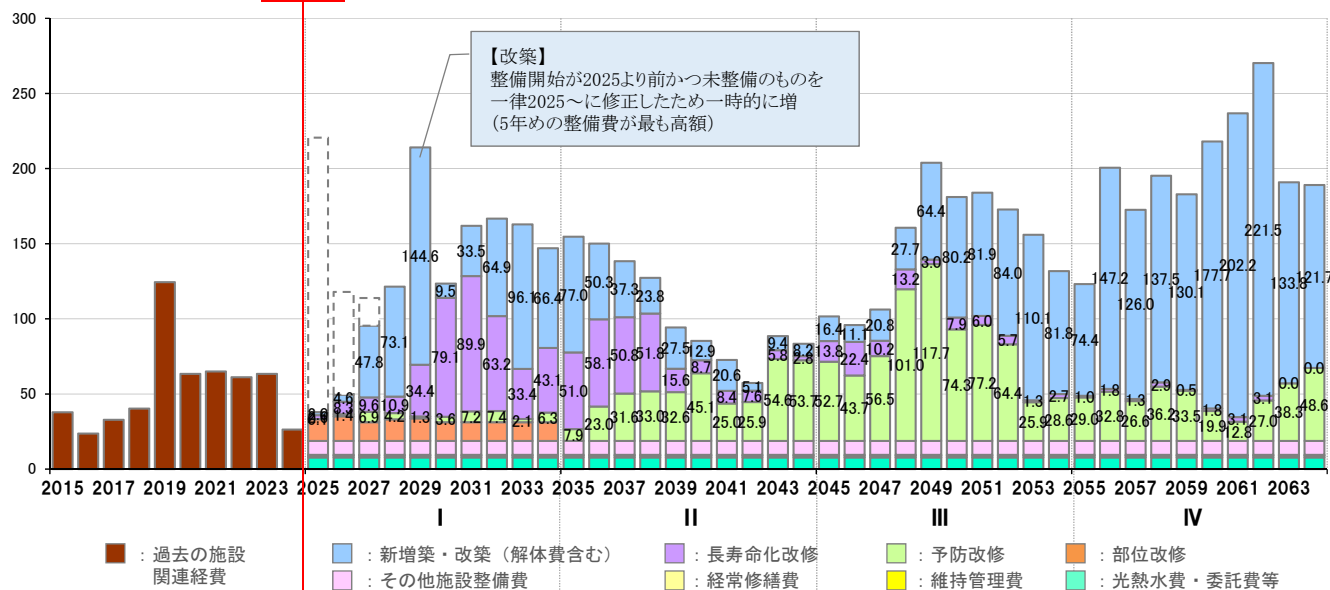
【資料5】 学校施設の現状

長期整備コスト試算（40年間：2025（R7）～2064（R46）年度）

※「コスト試算ツール」で算出（2024年（令和6年）3月11日現在）

（億円）

現在

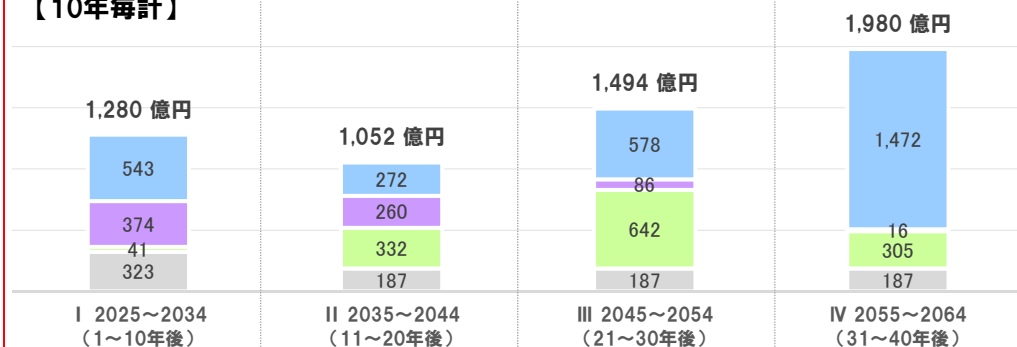


10年毎 （Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ/Ⅳ）

（億円）

【10年毎計】

- 新増築・改築
- 長寿命化改修
- 予防改修
- その他



10年毎の累計 （Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ）

（億円）

- 過去の施設関連経費
- 新増築・改築
- 長寿命化改修
- 予防改修
- その他

【総額】

（1年あたり）
128億円

（1年あたり）
117億円

（1年あたり）
128億円

（1年あたり）
145億円

（40年間で）
5,806 億円

【コスト大幅増加の要因】
・恒常的な物価上昇
・工事数の増加
（建替え（改築））
（長寿命化改修）



【資料5】 学校施設の現状

これまでの取組

■ 耐震化

年度 ▶	2007 (H19)	2008 (H20)	2009 (H21)	2010 (H22)	2011 (H23)	2012 (H24)	2013 (H25)	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)
	【体育館】耐震補強工事																
						【校舎】耐震補強工事											
										【校舎】改築工事							(完了)

福山市立小・中・義務教育学校の“耐震化率100%”

■ トイレの整備

【洋式化】

(*1) 休校を除く	2014年（平成26年）4月1日				2024年（令和6年）4月1日			
	大便器数	うち 洋便器数	洋便器 設置割合	備考	大便器数	うち 洋便器数	洋便器 設置割合	備考
小学校	3,922	855	21.8%	78校(*1)	3,631	2,138	58.9%	69校(*1)
中学校	1,968	517	26.3%	36校 ▶	1,755	987	56.2%	30校
義務教育学校	-	-	-	-	149	116	77.9%	2校
計	5,890	1,372	23.3%	114校	5,535	3,241	58.6%	101校

「福山市小中一貫教育と学校教育環境に関する基本方針」

- ・屋内運動場・武道場のトイレは、災害時の応急避難場所として地域住民が使用することから、全ての便器を洋式化する。
- ・校舎のトイレは、児童生徒数に応じた「適正便器数(*2)」を算定した上で、これらを全て洋式化するとともに、災害時における応急避難場所として 地域住民の使用が想定される1階の全ての大便器を洋式化する。
- ・屋外トイレについては、屋内運動場・武道場、校舎のトイレの洋式化の進捗状況を優先する中で検討する。

2016年度（平成28年度）から2018年度（平成30年度）までの3か年、洋式化に集中的に取り組み、すべての学校において、校舎の洋便器数は文部科学省の基準を満たした。
その後もトイレの改修工事や校舎の改築工事の機会をとらえて、洋便器の数を増やしている。

(*2) 児童生徒数に対する適正便器数の基準

(文部科学省「日本建築規格木造小学校・中学校建築」昭和24年／告示第1号)

	小便器	大便器
男子100人につき	4	2
女子100人につき	-	5

【バリアフリートイレの設置状況】

バリアフリートイレは、体育館または校舎に最低1か所整備している。ただし、校舎に設ける場合、体育館からの利用が可能な場所としている。

2024年（令和6年）4月1日							
	校舎		体育館		校舎・体育館		備考
小学校	65	94.2%	43	62.3%	40	58.0%	69校（休校を除く）
中学校	27	90.0%	18	60.0%	15	50.0%	30校
義務教育学校	2	100.0%	2	100.0%	2	100.0%	2校
計	94	93.1%	63	62.4%	57	60.6%	101校

【資料５】 学校施設の現状

これまでの取組

■ 空調設備整備

２０１９年度（令和元年度）、福山市立小・中・義務教育学校の**全ての普通教室及び使用頻度の高い特別教室**に空調設備を設置

【特別教室の空調設備の設置率】

２０２４年（令和６年）９月１日

	理科	音楽	美術	図工	技術	家庭	図書	通級	相談	その他	計
小学校	97.3%	98.6%	100.0%	9.7%	50.0%	4.1%	93.6%	100.0%	25.5%	39.6%	55.2%
中学校	61.4%	83.3%	93.3%	－	0.0%	1.7%	96.7%	100.0%	39.6%	44.4%	45.9%
計	81.8%	93.6%	93.8%	9.7%	1.9%	3.0%	94.4%	100.0%	32.6%	41.1%	51.5%

“ 使用頻度の高い特別教室 ”

※小学校は義務教育学校を含む

（当該教室を複数有する学校があるため１００％ではない）

「福山市小中一貫教育と学校教育環境に関する基本方針」

今後、学校の状況や子どもの健全育成の観点からもさらなる検証が必要であり、学校施設の耐震化工事の進捗状況、学校配置の適正化の取組と併せ、事業手法等も含め検討する。

こどもたちの安全と健康を守るための熱中症対策として、国は２０１８年度（平成３０年度）補正予算を計上し、ブロック塀・冷房設備対応臨時特例交付金を創設。全国の公立学校の空調設備の整備が進んだ。

今後の取組

■ 屋内運動場（体育館）長寿命化改修 ※２０２４年度～

- 【整備内容】 ○長寿命化改修 … 屋上防水、外壁改修、水道・電気設備などライフラインの更新 等
○ＺＥＢ化^(※) … 照明のＬＥＤ化、屋根、壁、窓ガラスなどの遮熱断熱フィルムの貼付などの高断熱化、内装の木質化 等
○防災機能の強化 … バリアフリースイールの整備、発電気接続設備の整備 等

【整備計画】 老朽度、地域バランスを考慮し、優先順位をつけて計画的に取り組む。

		(今年度)						
小学校	中学校	2024(R6)	2025(R7)	2026(R8)	2027(R9)	・・・		
4校	－	設計		工事				
2校	1校		設計		工事			
				設計		工事	・・・	
					設計		・・・	

(※) ＺＥＢ（ゼブ）化
Net Zero Building
快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間の一次エネルギーの収支をゼロにすることをめざした建物

■ 部位修繕工事

※継続

- 【整備内容】 ○外壁塗装改修工事
○屋上防水改修工事
○受変電設備改修工事 ほか

【整備計画】 長寿命化改修工事を検討しつつ、低コストでの長寿命化を図るため、老朽度を考慮し、優先順位をつけて計画的に取り組む。

【資料6】これまでの学校再編の取組

学校再編の取組経過

2014年 (H26) 1月 「望ましい学校教育環境のあり方について」
諮問

10月 答申

「福山市学校教育環境検討委員会」開催（計10回）

2015年 (H27) 6月 「福山市小中一貫教育と学校教育環境に関する基本方針」策定

8月 「福山市学校規模・学校配置の適正化計画（第1要件）」策定

【小学校】複式学級の解消

【中学校】1クラスあたり20人以上の生徒数の確保

a ▶ ●東村小ー今津小

※下線：第1要件該当校

b ▶ ●山野小ー広瀬小ー加茂小

d ▶ ○山野中ー広瀬中ー加茂中

c ▶ ●服部小ー駅家東小

●内浦小ー内海小ー千年小

○内海中ー千年中

2017年 (H29) 8月 「福山市学校規模・学校配置の適正化計画（第1要件）」一部変更

e ▶ ●内浦小ー内海小ー能登原小ー千年小ー常石小 + ○内海中ー千年中

小小・中中再編

義務教育学校

2019年 (R1) 3月 「福山市学校規模・学校配置の適正化計画（第1要件）」追加

f ▶ ○常金中ー新市中央中

★開校

4月 ◎鞆の浦学園 (とものうら)

2020年 (R2) 4月 ●遺芳丘小 (いほうがおか) a

●駅家北小 (えきやきた) c

2022年 (R4) 4月 ●○広瀬学園小・中 (ひろせ) ※特認校

●常石ともに学園 (つねいし) ※イエナプラン教育校

○新市中央中 (しんいちちゅうおう) f

◎想青学園 (そうせい) e

2023年 (R5) 4月 ●加茂小 (かも) b

○加茂中 (かも) d

第1要件解消

2024年 (R6) 4月 ●常金丸小 (つねかねまる) 新校舎供用開始
(交流館との複合化施設)



地域説明会



開校準備委員会

【資料6】 これまでの学校再編の取組

学校再編の成果と課題

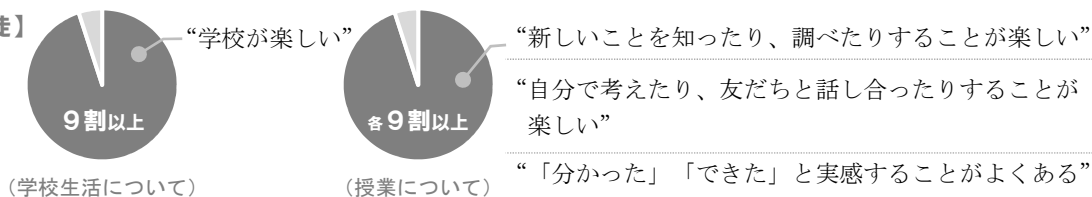
【成果】

☺環境整備

- ◆一定の集団規模の確保
 - ・多様性を認め合い、自ら考え、意欲的に学ぶことができる環境づくり（学びの面白さの実感、主体的・対話的で深い学びの実現）
 - ・多様な人間関係を通じた「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成

■再編後の学校に係るアンケート調査 2020(R2)～2023(R5)年度実施

【児童生徒】



【保護者】「仲間が増えて、いろいろと刺激を受けて成長している」「社会にでていく上で、人との関わりを学んでいかなければならないので、人数が多いことはメリットがある」と回答

→人間関係を築きながら成長している姿を通して、学校規模が大きくなったことを肯定的に捉えている。

- ◆教育内容の充実
 - ・地域の多彩な資源を活用した地域学習や探究学習



【遺芳丘小】@東村地域
かかし作り・農業体験



【駅家北小】@服部地域
ほたる学習（幼虫の放流等）



【想青学園】
「SOSEI学」における探究活動



【新市中央中】
地域・企業と協働した課題解決学習



【加茂小】@山野地域
ほたるかご作り



【加茂中】@山野地域
藍染め体験等

- ◆教職員配置の充実
 - ・一定数の教職員の配置
 - ・（中学校）全ての教科の教職員の配置

- ◆部活動の充実
 - ・多様な種類の部活動の選択
 - ・能力の向上や達成感の共有

- ◆大規模改修による教育環境の向上

【資料6】 これまでの学校再編の取組

学校再編の成果と課題

【課題】

㊟再編による課題

- *少数だが、環境になじめなかった子どもがいたこと。
- *交通手段がないと、地域の高齢者が学校行事等に参加しにくくなったこと。

㊟今後学校再編を進める上での課題

- *保護者や地域住民の理解を進めることの難しさ
- *施設整備に係る期間や予算の大きさ
- *義務教育学校を整備する場合の敷地の確保
- *スクールバスの増加
- *旧学校施設の取扱い（借地解消、解体費用）

【再編後の学校に係るアンケート調査の結果（主な意見）】

	開校年度	アンケート実施年度（2～3月）			
		2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)
遺芳丘小	2020(R2)	○	○		
駅家北小	2020(R2)	○	○		
新市中央中	2022(R4)			○	○
想青学園（前・後期）	2022(R4)			○	○
加茂小	2023(R5)				○
加茂中	2023(R5)				○

	児童生徒	保護者
遺芳丘小	○人数が増えて授業でいろいろな意見が出る。 ○田植えやかかし作りが楽しかった。 ○友だちがたくさんできて、より楽しくなった気がする。 △授業をしている時、後ろの人が話しかけてくるので、授業に集中できない。 △いろんな子に合わせるのが難しい。	○友だちが増えて、行動範囲も広がり今までできなかったことができ、係やクラブ、友だちなど選べる事が増えて楽しそう。 ○田植えや稲刈り、かかし作り等、経験したことのない体験ができた。 ○子どもたちは大人が思っているよりも早く慣れたと思う。 地域に関係なく、お互いを尊重し、仲良くできている。 △帰宅後遠くの友だちと遊ぶことができない。 △学校と保護者の距離が遠くなった。
駅家北小	○ホタル学習（ホタルの放流）が楽しかった。 ○みんなで教え合って、勉強がよく分かるようになった。 ○再編して色々な意見が出るようになったから、授業が分かりやすい。 △以前より発表できにくくなった。 △授業中うるさくなったと感じる。	○今までなかったクラス替えがある事を喜んでいて。 ○旧服部小の友だちは自分で考えて行動していくスタイルだったようで、子どももそのあたりは見習っているようだ。今までにない考え方がとても新鮮なようでいて嬉しくなった。 ○友だちの輪が広がり、各地域についても興味を持つようになった。 ○多くの子どもたちは変化に柔軟に対応していると思う。 ○人間関係の難しさも、服部では感じなかったことも感じるようになり、勉強になっていると思う。 今後、中学校へ進学する際の自信になったと思う。 △他学年との関わりが減った。

学校再編の成果と課題

【再編後の学校に係るアンケート調査の結果（主な意見）】

	児童生徒	保護者
新市中央中	○少人数ではできないような授業や行事が増えて、今後活かせる経験ができています。 ○先生・生徒間の関わりが多くなり、切磋琢磨し合える。 ○友だちと学び合いをして、なかなか発表できなくても、自分の考えを友だちに伝えることができるので、自分の中でも授業を理解しやすい。 ○自分とは違う意見を聞き、新しい視点が持てた。 △周りの目が気になって考えを発言することが難しくなった。	○新たな人との出会いをプラスにとらえ、ともに頑張っていこうという姿が見られ、成長を感じた。 ○人数が多くなってイベントに迫力がでた。 ○再編前後で、同じ校長先生で安心。再編しても不安なく過ごせるよう、先生の異動等配慮されていた。 ○社会に出ていくうえで、集団行動や人との関わり方を学んでいかなければならないので、人数が多いことはメリットがあると思う。 △先生との関わりが極端に少なくなった。 楽しく過ごすことは出来たが、相談することができなくなったのは残念。
想青学園（前期）	○先生との関わりが減ったけどその分自分で動けるようになった。 ○たくさんの地域・学校の人に来ていて、多くのいろいろな人との関わりを持つことができています。 ○前の学校よりも大きなイベントができる。 ○新校舎でわくわくする。言語や社会のメディアがある。 △人が多くてやりたいことがあまりできない。	○いろいろな地域の友だちができた。刺激になったと思う。 ○地域の事を積極的に学習する機会があり、自分の地域が素敵で地域だと実感できる。 ○前の学校では低学年は同じ教室で勉強していたので集中して学べなかったし、嫌なことがあっても逃げ場がなかったので、想青学園に来て本当に良かったと思っている。 △7校が一緒になり、多数のものを当たり前として捉えられ、違う子への配慮なくされていることがある。 △規模が大きくなって、保護者同士のつながりが薄れてきたのが寂しい。
想青学園（後期）	○大人数になって様々な人たちと関わるようになり、その人たちの視点に立つことの大切さに改めて気づくことができた。 ○前の学校ではできなかった授業などもできた。 ○設備が整っていて、とてもすごしやすい。 △大人数に慣れていなかったから人見知りをしてしまったり、授業で積極的になることができなくなってしまった。	○友だちとの交流が広がって、考え方もしっかりしてきたように思う。学校が楽しいと言うこともある。 ○再編した地域にグループに分かれて調べ学習ができた。 ○課題にしっかり取り組めるようになり、友だちがたくさんでき、自分の気持ちもはっきり言えるようになり、思いやりの気持ちが持てるようになってきている。 △以前は先生や友だちとの距離感が近かったため、集団の規模の大きさに子どもが戸惑い、ストレスを感じている。
加茂小	○班で課題について話し合ったり、どんどん新しいことを知ったりすることが楽しい。 ○友だちがいっぱいいるから楽しい。 ○山野・広瀬・加茂の地域が一緒になったから、少しでも自分たちの新しいまちのことを知りたいし他の人にも知ってほしい。 △友だち関係	○山野へ課外授業に行くなど、加茂独自の取組があつていい。 ○新しい友だちが増え、初めての野外活動への不安が大きく、楽しみより不安が勝る中、周りの友だちや先生方の声かけのおかげできちんと参加でき、帰ってきたときには楽しかったと生き生きと話してくれた。 周りの支えを受けながらだが、自分の力で不安を乗り越える力をつけたのではないかなと思う。 △友だちづくりに少し悩んでいるように思う。
加茂中	○地域のことを調べたり、友だちと意見を交流したり、地域のためになることを考えたりするのが楽しかった。 ○人との関わりが増えたことにより、挨拶などのコミュニケーションを取るようになった。 △友だち関係	○分からない子がいたら友だち同士教え合える環境 ○色々な地域と触れ合い学んでいて、楽しく学習ができています。 △（ふるさと学習）子ども達にあまり浸透していないような感じがする。

【資料6】 これまでの学校再編の取組

多様な学びの場の整備

常石ともに（つねいし）学園



イエナプラン教育校

異年齢集団（1～3年生、4～6年生）で4つの基本活動である対話・遊び・仕事・催しをもとに教育活動を行う。

広瀬（ひろせ）学園小・中学校



特認校

大きな集団での学習が難しい、在籍校への登校が難しいなど、教育上の配慮が必要なこどもたちを対象とした小・中学校の施設一体型校

開校 ▶ 2022年（令和4年）4月

2022年（令和4年）4月

児童生徒数 ▶ 159人

小学校：40人

中学校：44人

学級数 ▶ 通常6学級＋特支3学級

小学校：通常6学級＋特支2学級

中学校：通常3学級＋特支2学級



常金丸（つねかねまる）小学校



小学校・交流館・放課後児童クラブとの複合施設

- ・校舎が耐震補強困難なため、旧常金中学校と旧新市中央中学校の再編後、旧常金中学校の位置に校舎を移転改築
- ・「福山市地域交流施設等再整備基本方針」に基づく常金丸交流館の整備を検討
- ・地域から、小学校と交流館の複合化についての要望書の提出

供用開始 ▶ 2024年（令和6年）4月

児童数 ▶ 93人

学級数 ▶ 通常6学級＋特支2学級



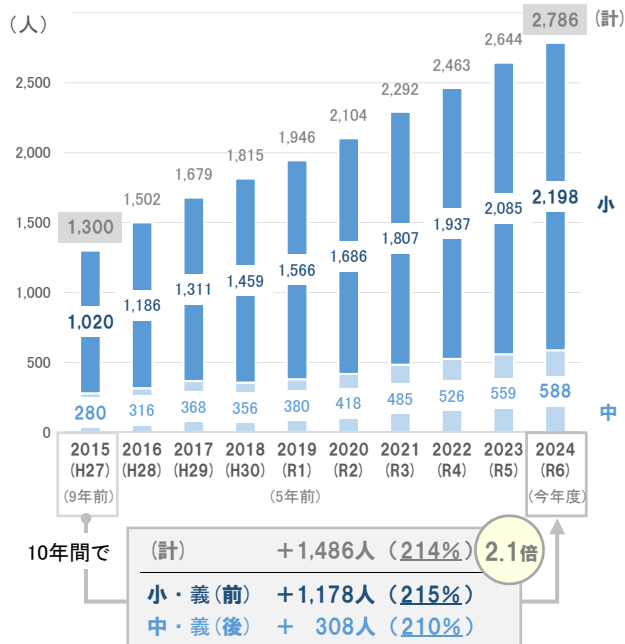
※児童生徒数・学級数は2024年（令和6年）5月1日現在

【資料7】 特別な支援が必要な児童生徒の状況

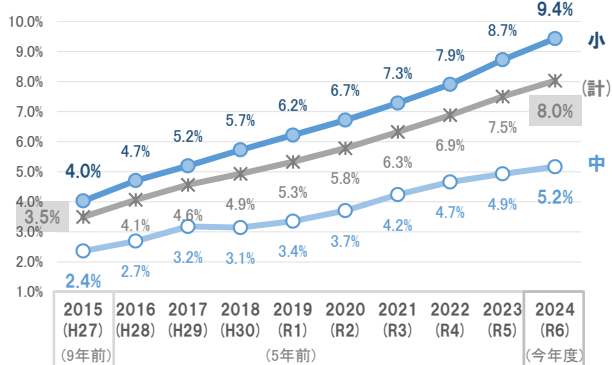
特別支援教育

「小」：小学校・義務教育学校前期課程、「中」：中学校・義務教育学校後期課程

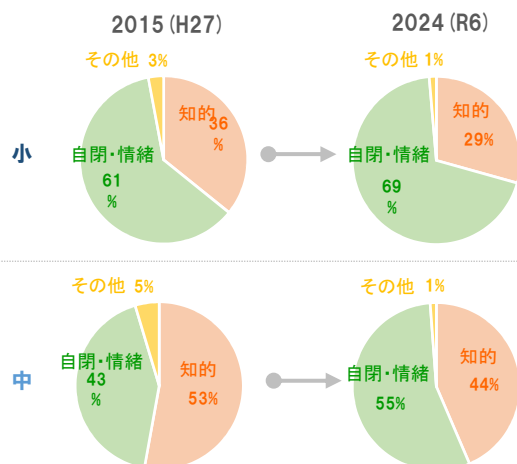
【特別支援学級の児童生徒数の推移】



【割合】 対全児童生徒数



【割合】 種別

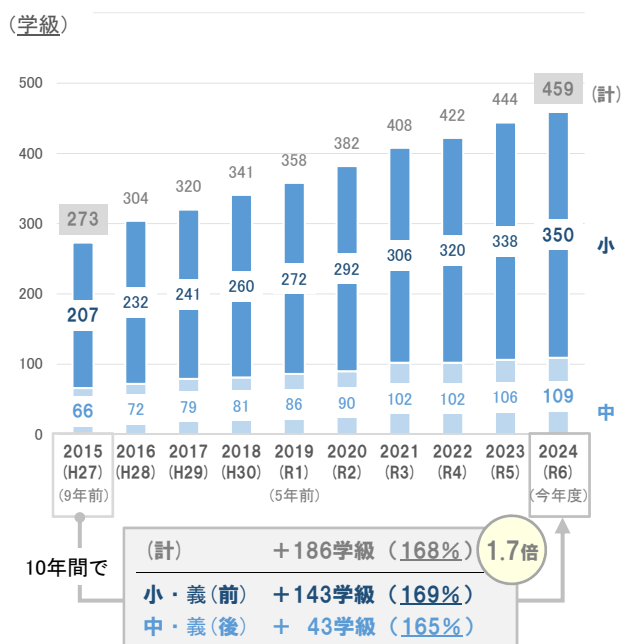


その他：肢体不自由、難聴、病弱、弱視、院内

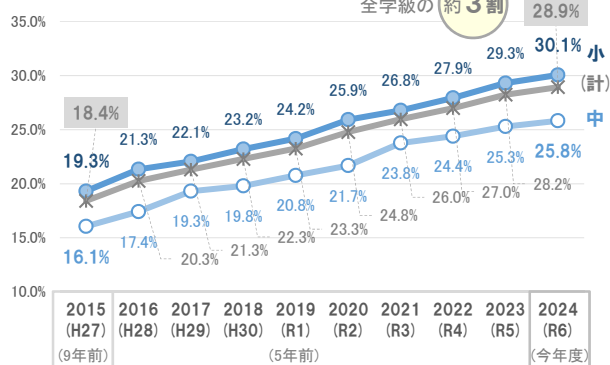
※構成比の数値は四捨五入しているため、個々の集計値の合計は必ずしも100%とならない場合がある。

【特別支援学級数の推移】

(各年度5月1日現在)



【割合】 対全学級数



※特別支援学級：1学級8人までの少人数学級

【増加の要因】

障がいの程度に応じた特別の場合から、一人一人に応じた適切な教育支援を受けられる場への考え方の変容など特別支援教育への理解の深まりなど

【特別支援教育体制】 ※2025 (R7) 年度

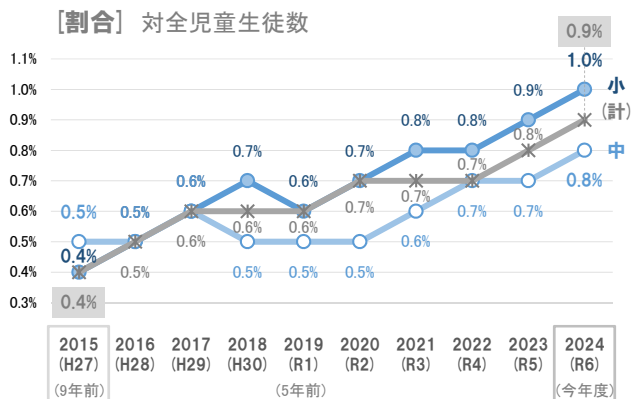
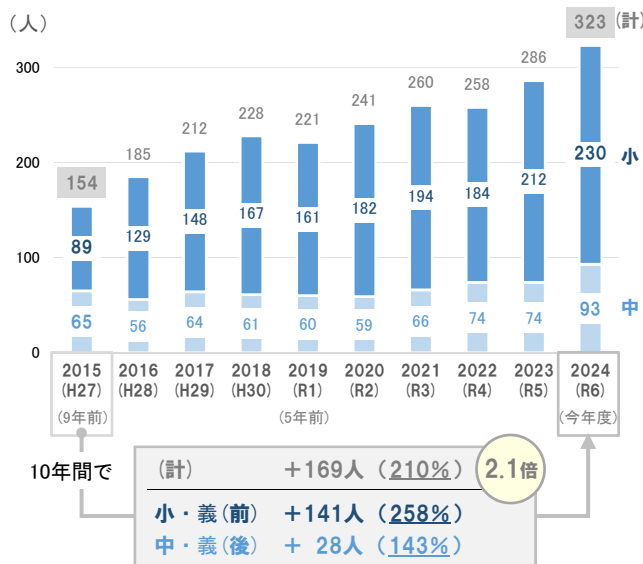
介助員 (304人)
 学校支援員 (65人)
 難聴学級指導員 (4人)
 看護介助員 (30人) を配置

【資料7】 特別な支援が必要な児童生徒の状況

外国人

【外国人の児童生徒数の推移】 (各年度5月1日現在)

「小」：小学校・義務教育学校前期課程、「中」：中学校・義務教育学校後期課程



【増加の要因】

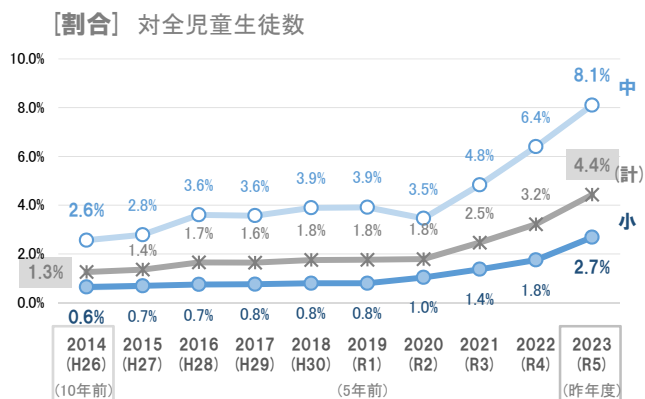
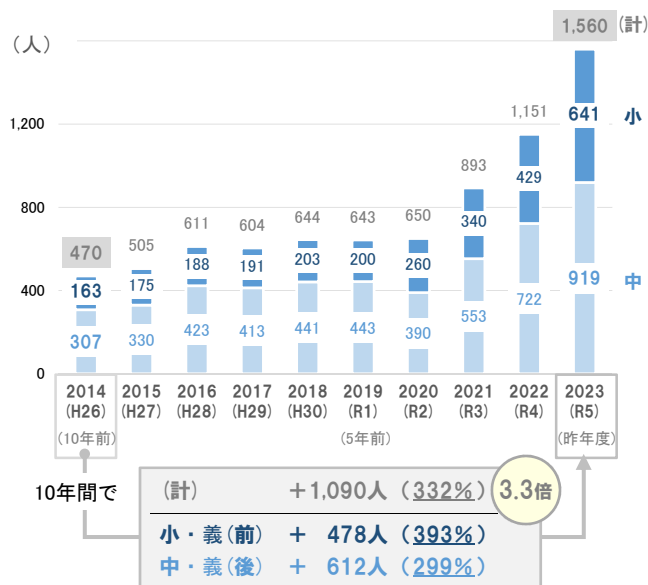
市内の外国人居住者の増加

【外国人の児童生徒への支援】 ※2025 (R7) 年度

- 日本語初期指導教室の開設
- 日本語初期指導教室と学校との連携 (支援に係る指導助言)

不登校

【不登校の児童生徒数の推移】 (各年度3月31日現在)



※2020 (R2)～2022 (R4)については、文科省調査の基準 (新型コロナウイルス感染回避も含む) で集計

【増加の要因】

学校生活に対してやる気が出ないなど様々。背景には、無理して学校に行かなくてもいいという意識が児童生徒や保護者に広がったことなどがある。

【不登校の児童生徒への支援】 ※2025 (R7) 年度

- 校内外フリースクール
 - ・かがやき (中央、東部、西部)
 - ・きらりルーム (小学校 2校、中学校 9校)
 - ・学校独自で教室外の居場所を設けている学校も多数あり
- メタバースを活用した不登校児童生徒への支援
- 自然環境を生かしたフリースクール「おやまの学校」の月1回の定期開催
- ネウボラセンターにおける相談窓口の設置

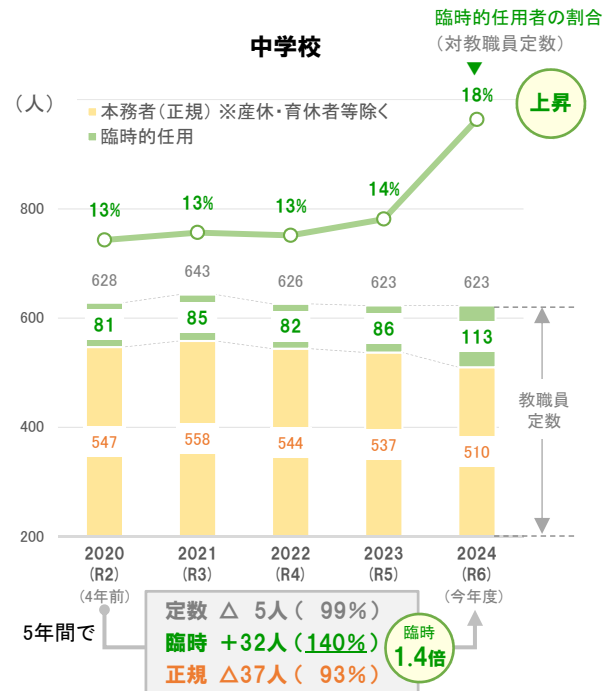
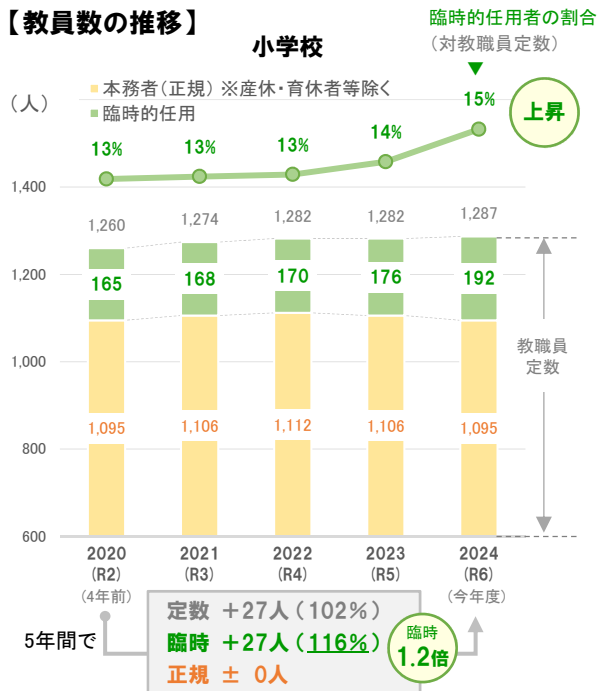
【資料8】 教員の現状

教員不足

■ 要因

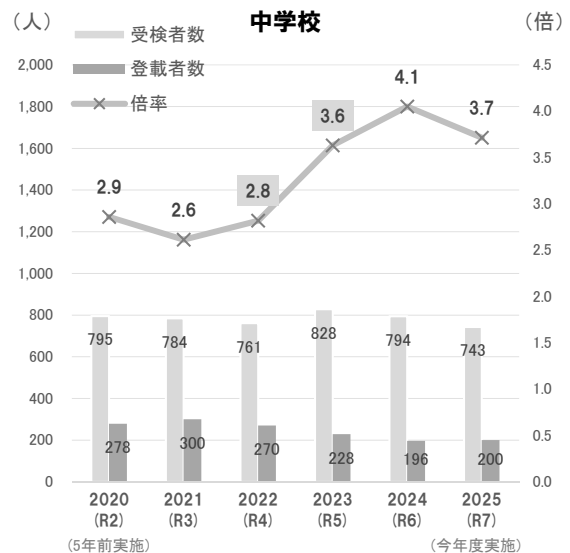
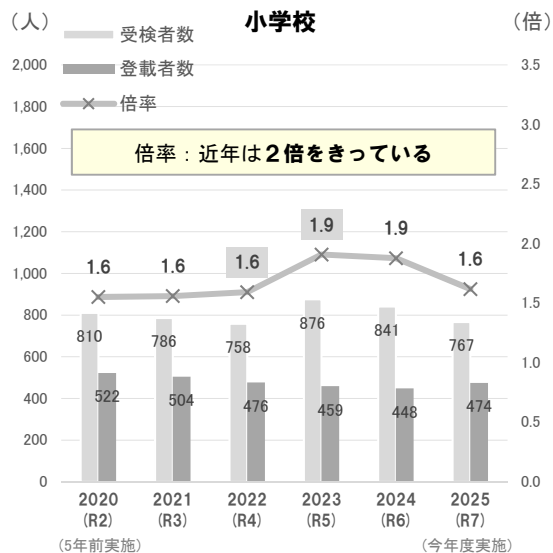
- 臨時的任用教員の需要が増加する中、正規採用枠の拡大等に伴い、既卒受験者の正規教員としての採用が進み、**臨時的任用教員が不足**している。
- 新規学卒での**教員採用試験受験は、減少傾向**にある。

【教員数の推移】



臨時的任用教員数は年々増加

【教員採用選考試験倍率】※倍率：受験者数／登載者数



(参考)

全国との倍率の比較

	小学校		中学校	
	2022 (R4)	2023 (R5)	2022 (R4)	2023 (R5)
広島県・広島市	1.6 ↘	1.9 ↘	2.8 ↘	3.6 ↘
全国	2.5	2.3 (過去最低)	4.7	4.3

※「↘」：全国より低い

【資料１０】 義務教育学校の特徴

義務教育学校とは

- ・ 小学校課程から中学校課程まで、**義務教育 9 年間を一貫して行う学校**
(2016 年(平成28 年)に新設の学校教育制度)
- ・ **柔軟な教育課程(カリキュラム)の編成、前期課程での教科担任制や新教科の創設**など
- ・ **日常的な異学年交流**による、上級生と下級生相互に良い効果(下級生の手本、上級生への憧れ)
- ・ 一人の校長のもとにつくる小中教職員一つの組織
- ・ 教職員の緊密な情報共有による、個に応じた指導・支援の継続・実現



福山市の義務教育学校

	鞆の浦 (とものうら) 学園 	想青 (そうせい) 学園 
開校	▶ 2019 年(平成31 年) 4 月	▶ 2022 年(令和4 年) 4 月
児童生徒数	▶ 前期：117 人 後期：83 人	▶ 前期：343 人 後期：218 人
学級数	▶ 前期：通常6 学級+特支3 学級 後期：通常3 学級+特支3 学級	▶ 前期：通常12 学級+特支5 学級 後期：通常7 学級+特支3 学級
対象校	▶ ●鞆小 ○鞆中 [2014(平成26) 年度] 連携型小中一貫教育推進モデル校 [2016(平成28) 年度] 施設一体型モデル実践校 [2017(平成29) 年度] 義務教育学校モデル実践校	▶ ●内浦小 ○内海中 ●内海小 ○千年中 ●能登原小 ●千年小 ●常石小



※児童生徒数・学級数は2024 年(令和6 年) 5 月1 日現在

義務教育学校の特色（新教科の創設）

義務教育学校は、小中の枠を超えた探究活動や教科横断的な単元など9年間の学びをつなぎ、小中一貫教育の効果を高めることができる。学校独自の新教科を創設することが可能。

鞆の浦学園 【新教科】



■「鞆学」

- ・9年間を通して地域の人・物・事を教材とした探究的な学習

〔前期課程〕

学年ごとにテーマを設定し、地域とのつながりを大切にしながら学ぶ。

〔後期課程〕

個人でテーマを設定し、身に付けた力を活用し、課題解決に向けた自己探究を行う。

（例）

こども商店街

一岡山県立大学学生とのコラボ、
まちの活性化イベントー

2・3年生

鞆学での学びを遊びやクイズにして表現
可動式縁側（えんだら〜）の制作

4年生

防災体験コーナーや防災新聞の作成

5・6年生

鞆の浦体操の考案・実演・普及
（理学療法士等から学び、高齢者向けの
体操を考案）
ともクラ弁当の販売（地元企業とのコラボ）

7・8年生

自己探究で作成したポスター掲示



鞆の浦体操を広める！



鞆こども園やさくらホームに向き鞆の浦体操を広めました！「肩にさくわ！」「楽しかったあ。」「また来てね！」と言ってもらえました。また、運動会でも全校で鞆の浦体操を実施しました。

想青学園 【新教科】



■「SOSEI（そうせい）学」

- ・内海、沼隈の多彩な地域資源を学習素材とした探究的な学習。企業や地域、行政から出されたミッションの達成に向け、調査、取組考案、分析・改善、発表・実践する。

（例）

3年生

内海・沼隈のよさがつまったラッピング
スクールバスを（鞆鉄道）

4年生

内海・沼隈の防災や減災の取組と一緒に
（沼隈支所）

5年生

たくさんの人に内海の海を大切にしようという思いを（福山まるごと体験推進協議会）

6年生

地域の文化や歴史の良さを地域に発信
（山本瀧之助研究会）

7年生

地域の願い・課題を見つけよう
（保育・福祉・地域・産業関係者）

8年生

ふるさと職業・企業探究（地元企業等）

9年生

SOSEI祭をもちあげて（学校及び沼隈支所）

- ・地域の行事と合同開催した「SOSEI祭 and 人・まち・ふくしまルシェ2023」で、各学年が「SOSEI学」の取組を発表

→ 全児童生徒対象のアンケートで、
9割以上が「地域に愛着を持っている」と回答



義務教育学校の特色（施設）

想青学園 【学校コンセプト】



「かかわる つながる」ことによって生き生きと輝く学びの場

1 いつでもどこでも学びの場となる学校

- ★ 様々な学習の形態、メディア、場所を用意し、教室を超えた柔軟で創造的な学習空間



2 つながりとふれあいの生活空間

- ★ 日常の動線を考慮し、普通教室、特別支援教室、特別教室を各階に配置することで、交流や学びを促進
- ★ 教室に併設したクラスブースを設置



3 地域の人々との共創空間

- ★ 再編した広い地域の方々とのつながりを大切にした教育活動が展開できる環境づくり（ランチルーム、ふれあいルームなど）



4 安心安全な学校施設

- ★ 盛土をしてかさ上げ造成（津波浸水想定区域）
- ★ 受電設備を上階に、備蓄物資の保管場所も確保
- ★ 災害後の学校再開が早期にできるよう職員室を重要書類とともに2階に配置



義務教育学校の特色（教職員）

○一人の校長のもとにつくる小中教職員一つの組織

○教職員の緊密な情報共有による、個に応じた指導・支援の継続・実現

- ・後期課程（中学校段階）の専門性を活かした指導を取り入れることにより、前期課程（小学校段階）での発展的な指導が充実する。
- ・前期課程でのきめ細かな指導技術を取り入れることにより、後期課程の授業がより分かりやすくなったり、補充的な指導が充実したりする。
- ・9年間を通し学ぶ「新教科」では、両方の教員が参画することにより授業の質が高まる。
- ・授業やこどもに係る情報共有のもと、9年間を見通した教科指導、生徒指導が充実する。

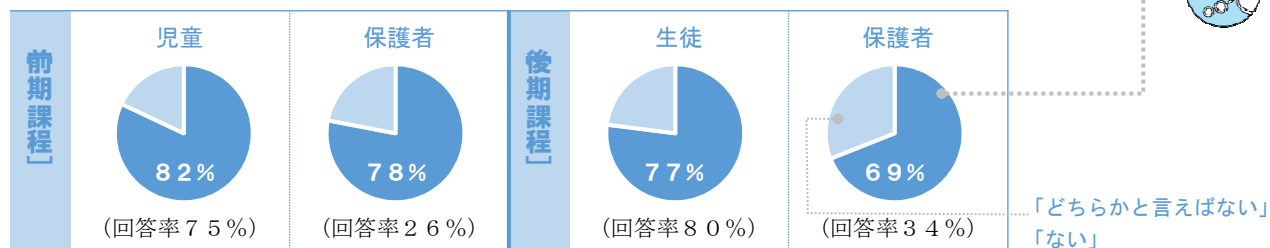
【資料10】 義務教育学校の特徴

義務教育学校についてのアンケート調査の結果

想青学園

2024年（令和6年）2月実施

■義務教育学校について、**良いことが「ある」「どちらかと言えばある」**と回答した割合



■主な意見

児童生徒

保護者

前期課程	○いろいろな学年と生活して新たに得られるものがある。 ○後期課程がいることで、目標が分かる。 ○部活や後期課程の活動の様子を見ることができる。 ○後期課程との交流がしやすい。優しくしてもらえる。助け合うことができる。 ○全校集会のとき中学生が最初に入って静かな雰囲気を作ってくれている。 ○学校が小学生の考えだけではなく、中学生の考えも加わって成り立っていく。 ○担任の先生がいなくても後期の先生が教えてくれるところがいいところだと思う。 ○前期と後期の人達が一緒にいることで、皆で大きなイベントをすることができる。 ○委員会の時、前期の人が困っていると後期課程の人が助けてくれるから安心。	○様々な年齢の子どもと関われる。 ○後期課程の先輩たちの頑張っている姿を見ることができて刺激になる。 ○後期課程になったらこうしたいという明確な目標が立てやすい。 ○困ったとき、後期課程の生徒が助けてくれており、自分もこうなりたいと優しさや思いやりが生まれている。 ○後期課程の先生が前期課程の児童も指導してくれており、後期課程になる不安が減少できる。 ○運動会などの行事を見ると、中学生までのイメージが児童も保護者も持ちやすい。
	△後期生が少し怖い。 △6年生を終えても後期生になる実感がわからない。	△小学校の卒業式がなく、区切りがつけにくい。 △運動会は、前期課程と後期課程で分けた方がいい。
後期課程	○関わったことのない人やみんなと関わるができる。 ○上級生が下級生にお手本を見せられる。 ○1年生から9年生までが団結して一つのことをしているのがいい。 ○授業で学んだことを他学年に教えることで、いい経験になり学びが深まる。 ○幅広い学年が交流することで、年齢に合わせた話し方や聞き方などの勉強になる。 ○ほとんどの人が挨拶を積極的に行っている。	○前期課程の児童は後期課程へのイメージを持ちやすく、ギャップも少なくスムーズに後期課程へ移行でき、後期課程の生徒にとっても前期課程の子たちと接することで視野を広く持てる。 ○小さい学年に関わることで優しさや思いやりなどが育つ。 ○違う年齢の子どもが集まってくるため、それぞれの立場に立った考え方ができる。 ○上級生を見て、良いことも良くないことも学び、考えて行動するから。 ○前期課程の手本になるよう努力していること。 ○行事や給食、遊びなどで交流できること。 ○多くの学年で協力し合えること。 ○入学式、卒業式が1度でいいこと。きょうだいがいるが、参観日や運動会への出席に都合をつけやすいこと。一度に子どもの様子を見ることができること。 ○年齢の離れている子どもの保護者との交流が増えた。 ○一人っ子、近所に小さな子どもがいないが、学校で交流できる。
	△授業時間がずれていて、うるさいときがある。	△前期・後期一緒に実施するため、学校行事の内容が薄くなった。 △環境の変化がない期間が長くなるので、気持ちの切り替えが難しくなるのではと思う。

【資料１１】 義務教育学校教職員アンケート結果

□アンケートの対象 福山市内の義務教育学校に勤務する校長及び教頭並びに在籍２年目以上の教職員（非常勤を除く。）／勤務経験のある教職員（対象者７６人）

□アンケート集計期間 ２０２５年（令和７年）５月２３日（金）～同年５月２９日（木）

□アンケート回答状況 鞆の浦学園 ２２人／３５人中 回答率６２．９％
 想青学園 ３２人／４１人中 回答率７８．０％
 合計 ５４人／７６人中 回答率７１．０％
 ※どちらにも勤務経験のある場合は、直近の勤務校に含む

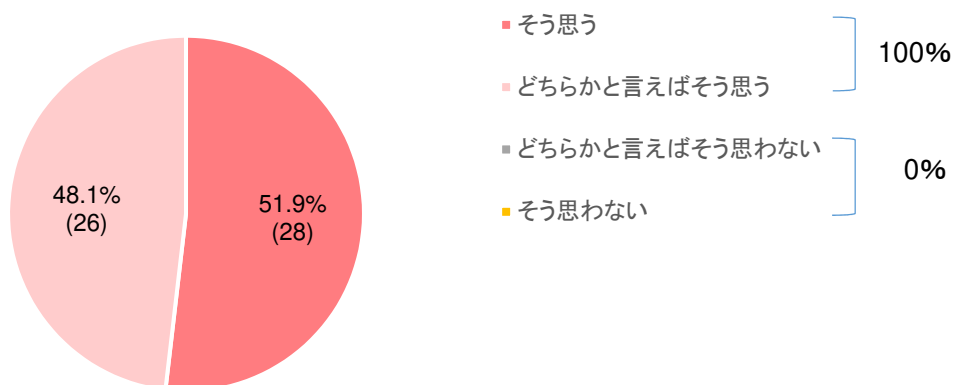
□参考（学校規模） ・鞆の浦学園（２０１９年度開校 児童生徒数１９７人）
 ・想青学園（２０２２年度開校 児童生徒数５４２人） ※2025/5/1現在

■義務教育学校の良さ

１．（教育内容の充実_小中一貫教育の推進）

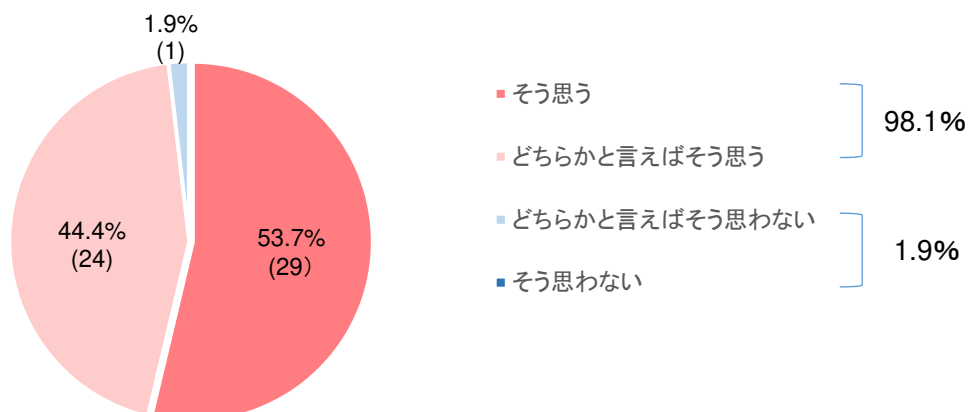
系統性や連続性を考慮したカリキュラムの編成や指導を行うことができる。

１年生からの英語学習、前期課程の教科担任制、後期課程のチーム・ティーチングなど、学校の実態に応じた取組ができる。



２．（教育内容の充実_柔軟なカリキュラムの編成）

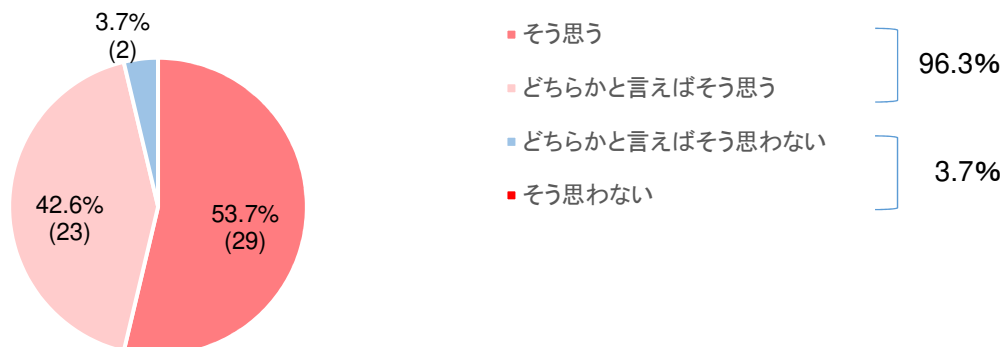
学校独自の新教科（「鞆学」「SOSEI学」）を創設でき、小中の枠を超えた探究学習や教科横断的な単元など、９年間の学びをつなぐカリキュラムが編成できる。



■義務教育学校の良さ

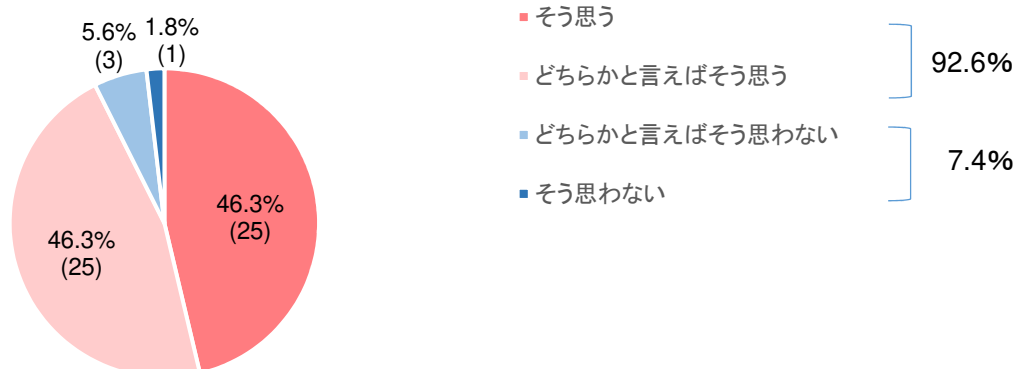
３．（教育内容の充実_個に応じた指導・支援）

一つの教職員組織のもと、緊密に授業や児童生徒に係る情報共有をすることで、
個に応じた指導・支援を継続的に行うことができる。



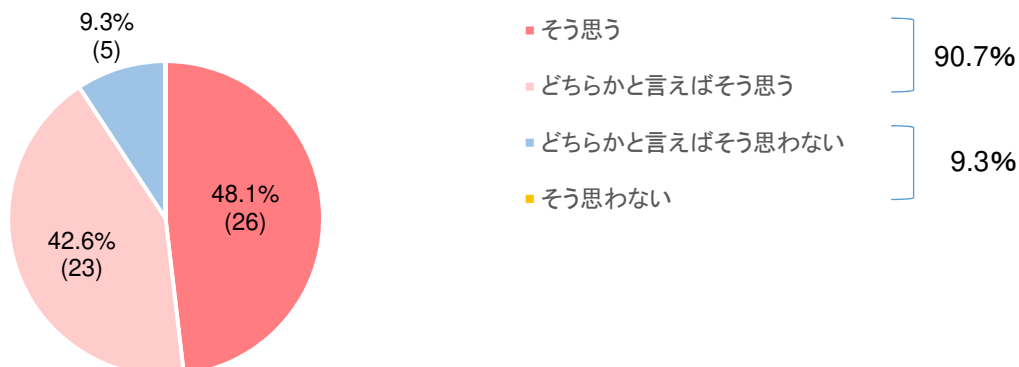
４．（児童生徒_日常的な異学年交流）

異学年交流により、上級生は下級生の手本になろうとする意識や優しさが育ち、
下級生は上級生に対して憧れを抱くなど、相互により効果が生まれる。



５．（児童生徒_中１ギャップの緩和）

学習内容や指導方法等を前期・後期課程の教職員が共有することで、
前期課程から後期課程への接続を円滑にできる。

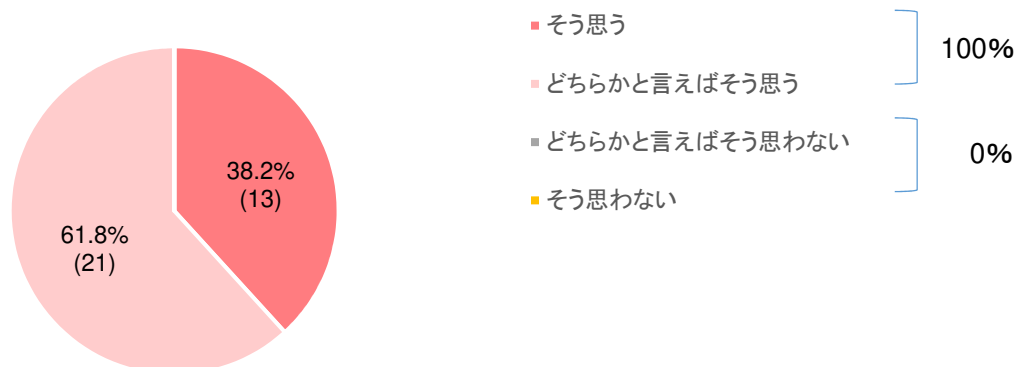


■義務教育学校の良さ

6-1. (教職員_授業参観や研修を通した学び合い)

《前期課程の授業を担当している人》

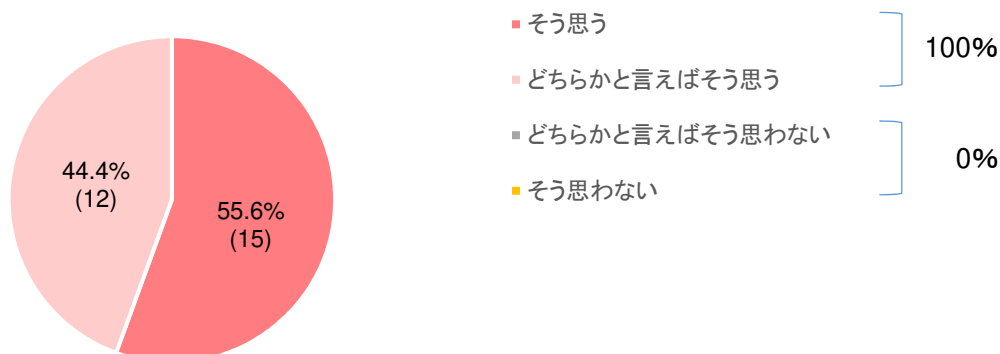
後期課程の専門性を活かした指導を取り入れることにより、前期課程での発展的な指導が充実する。



6-2. (教職員_授業参観や研修を通した学び合い)

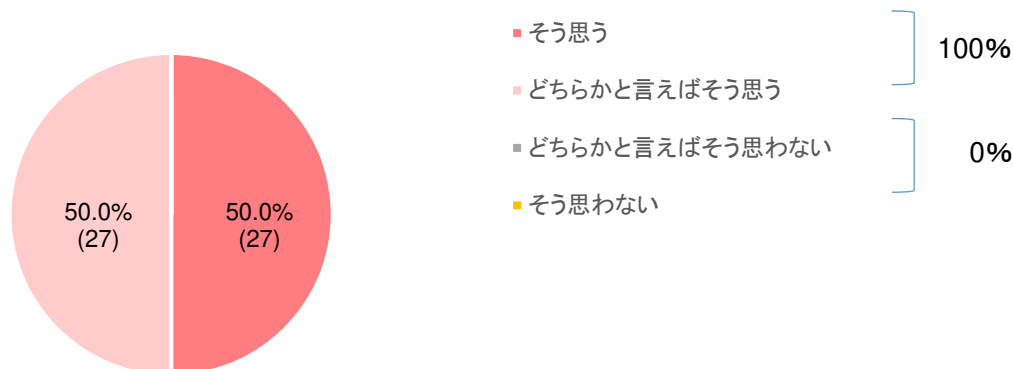
《後期課程の授業を担当している人》

前期課程の学習状況を知ることにより、後期課程での教科や単元のつながりを意識でき、指導が充実する。



7. (家庭_9年間を通した保護者との連携)

9年間の成長を見通しながら学校と家庭が連携し、児童生徒の実態を踏まえた取組を進めることができる。



■義務教育学校の良さ

8. その他、義務教育学校の「良さ」について感じていることがあれば、具体的に記載してください。（記述）

【主な意見】

教職員体制

- ・異校種の教職員が共に働くことで、良さを認め、高まり合う教職員集団になっている。
- ・全ての先生が、1年生から9年生までの全ての児童生徒に、自分の学校の子どもたち」という意識で接することができることが素晴らしいと感じる。義務教育を終える9年生の姿に、全教職員が関わっているという実感は、他では味わえない。
- ・一人の校長のもと、ぶれることなく9年間の継続した取組が実現できると考える。
- ・前期の教員が後期の教員の進路実現に向けた責任、覚悟や成績管理・事務処理等を見ることで子どもたちに力を付けることへの意識を高めたり、後期の教員が前期の教員の丁寧で工夫された掲示物や子どもへの手厚い関わりを見ることで学習環境や傾聴の大切さに気付かされたりしていた。
- ・中学校の先生に授業を参観してもらい、アドバイスをいただいたり、教材研究を共に行ったりすることができる。小学校の先生と中学校の先生がいるので、様々な見方考え方ができて勉強になる。
- ・教頭が2人在籍することで、相談しながら、校務を円滑に推進できる。
- ・前期課程で後期課程の教員が専科を行うこと、後期過程に前期過程の教員が部活指導することで、働き方改革が進んでいる。

指導・支援

- ・義務教育9年間を見通した系統的な学び・指導を実践することができる。
- ・特に生徒指導では、前期課程の段階から人間関係を築くことができ、指導に深みをもたせることができた。
- ・学習面でも発達面でも、9年間の成長の見通しや過程を教員として学ぶことができる。
- ・9年間、子ども一人ひとりの特徴や背景などを知った上で関わるができる。
- ・9年間の児童生徒の姿や卒業後の姿を見ることができるため、今の時点でここまで力を付ける必要があると明確に考えることができるようになった。保護者とも、先を見据えながら話ができている。
- ・あらゆる部分において、スムーズな連携ができるのは良さだと思う。

児童生徒の姿

- ・中1ギャップがほとんどなく、生徒も安心して生活できているように感じる。体育祭やその他の行事など前期後期で協力して行う行事も多く、後期の生徒は手本になろうと頑張っている。
- ・9学年が一つの学校で学び、一緒に取り組む姿はとても良い。9年生が小学生（低学年）と一緒に何かをしている風景は、義務教育学校ならではの風景だと感じる。
- ・9年生と1年生が遊んだり、放課後に8年生と2年生がサッカーをしていたりと、子どもたちが遊び合い、学び合い、助け合える環境が自然にできている。
- ・様々な行事を前期・後期合同で行うので、後期課程の子どもたちは通常の学校よりも多くの幅広い学年の児童生徒をまとめることになるため、良い経験を積むことができている。
- ・異学年交流をすることで、小学生は中学生の先輩の姿を見て憧れていた。
- ・後期課程のレベルの高い美術の作品や独自教科の発表などを前期課程が目に見ることができ、ゴールイメージをもちやすくなる。
- ・学年を超えたつながりができやすい。
- ・後期課程の部活動に、前期課程の高学年から参加することで、活気と継続性が出ている。

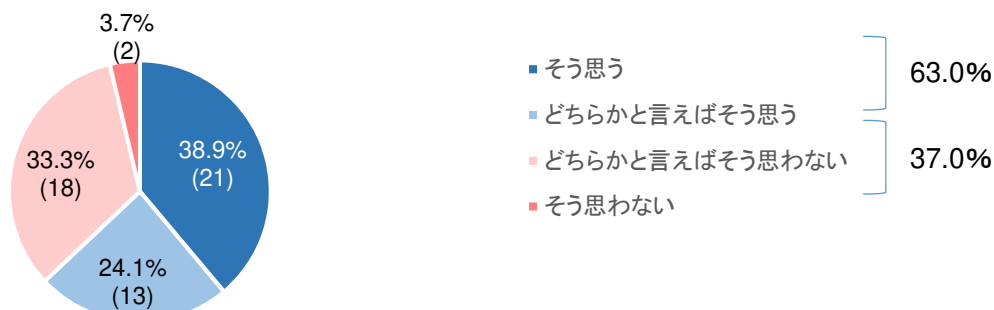
地域との連携

- ・授業に係る地域連携が図りやすい。
- ・独自教科では、校区内の様々な地域に出向いた取組により、地域とのつながりを深めている。

■義務教育学校の難しさ

1-1. (児童生徒)

小学校から中学校への進学がなく環境が変わらないため、児童生徒が気持ちを切り替えることが難しい。



1-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

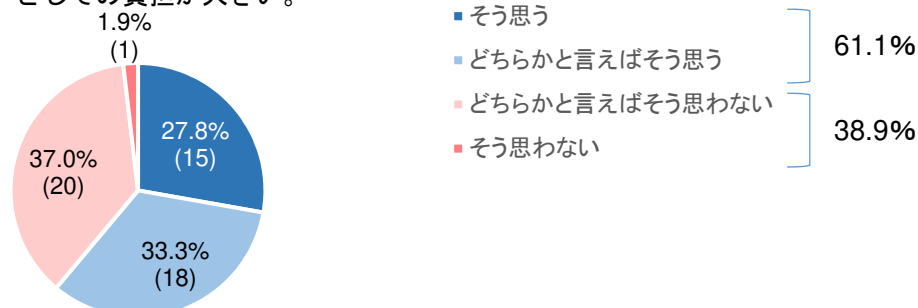
- ・制服や教科書、部活動などの環境が変化するため、切り替えはできている。
- ・6年生時には子どもたちの気持ちを後期へ持っていくように促すことが必要だが、制服や教科担任制などの環境が変わることで切り替えることができている子が多いようだ。
- ・制服が変わることは生徒にとって大きなステータスだと本人たちが言っていたので、4月の7年生には意識的に後期生になったという自覚を持てるような声かけをしている。
- ・前期後期で分けるのではなく、前期、中期、後期と段階を区切り、部活への参加、委員会の責任など、中期から中学校の内容を徐々に取り入れていくようにした。
- ・前期の先生からの声かけを日常的に行う。
- ・6年生を担当したときには、授業等での学習の仕方の違いや、後期で頑張りたいことを明確にして進級するよう、繰り返し声をかけた。常に後期課程のことを伝えていた。
- ・勉強の仕方を丁寧に確認する。
- ・卒業後の目標や自分の姿を考えさせ、進路についての取組をしていく。
- ・小学校（前期）の延長の意識でいる生徒が多いため、中学校は高校進学に向けての進路のこともあるため、学習面、生活態度などの話を生徒に話すようにしている。
- ・後期課程のルールを意識して活動するように学年や授業を通して話をする。
- ・後期課程の難しさや頑張った方がいいことを生徒の声をもとに前期課程に伝えるようにしている。
- ・「自立&自律」ということをより丁寧に指導することを心がけ、保護者にも最初の懇談でそのことをお願いする。
- ・7年生の段階から進路を意識させることで、前期課程からの意識のステップアップを図っている。
- ・前期と後期では変わってくるという話を授業で行なっている。
- ・中学校の3年間は社会へ出る準備期間であること、今後の進路は自分で切り拓かなければならないことを節目ごとに伝えている。

■義務教育学校の難しさ

2-1. (児童生徒)

6年生に、前期課程最高学年としてのリーダーシップを育てにくい。

または、9年生のリーダーとしての負担が大きい。



2-2. (「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合)

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。(記述)

【主な意見】

6年生のリーダーシップの育成

- ・ 6年生に向けて最高学年だという話をしている。
- ・ 6年生のリーダーを育てるため、意図的な取組を行う。
- ・ 前期課程の活動で、リーダーとして活躍させている。
- ・ 1年生の手伝いなどは6年生がすることで上級生の自覚をもたせる。また、プール掃除は6年生が主体となって動いている。
- ・ 6年生が独自で1年生とのレクレーションを仕組むなどして、リーダーとしての自覚をもたせるための取組をしている。
- ・ 生徒会に6年生も参加して、全校の前に出る経験を積んでいる。
- ・ 一部行事で6年生をリーダーとして動く場面を設定している。

9年生のリーダーとしての負担

- ・ 9年生の負担が大きくなるということはない。
- ・ 行事の準備等を9年だけでなく、6年生にもさせている。
- ・ リーダーを多めに配置することにより、役割分担をして一人へ負担が重ならないようにしている。
- ・ 教員がサポートする。
- ・ 委員会には5年生から入っており、9年生には人を動かすこともリーダーの仕事だと伝えている。

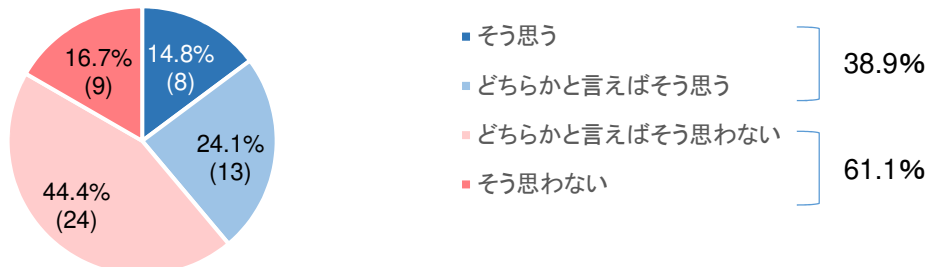
学年によらないリーダー性の育成

- ・ 学年にこだわらずリーダーになれる学年や個がリーダーになる風土を作っている。
- ・ 学年を「1年～4年」「5年～7年」「8年・9年」の3部に分けて、それぞれの区切りを明確化することで、こどもたちが気持ちの切り替えを意識できるように教員がファシリテートすることが大切だと考えている。そうすれば、4年と7年生をリーダーとして育てることができる。また、児童会・生徒会にあたる組織の会長・副会長をはじめとする執行部や委員会の委員長などは、7年生までで組織して、8年生・9年生は、見守ったり、最低限の助言をする程度で、頼れる先輩として憧れの対象になればよいと考えている。

■義務教育学校の難しさ

３－１．（行事）

全校行事、前期・後期別行事など、学校行事の持ち方、内容の検討が難しい。



３－２．（「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合）

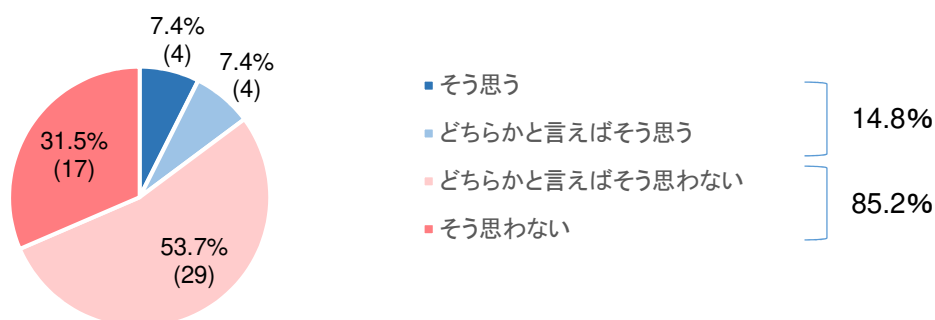
各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。（記述）

【主な意見】

- ・誰でもできる、かつ楽しめるものを考える。例：スポーツ大会でパラスポーツを取り入れることで、誰もが参加でき、楽しめるようにしている。
- ・１年生と９年生が一緒に参加する際、言葉の言い回しや内容を精選している。
- ・必要な行事かどうかを吟味して、精選している。
- ・前期・後期のそれぞれの先生に確認しながら検討している。
- ・学習発表会は、後期課程の行事との兼ね合いや気候を踏まえ検討している。
- ・前期課程を意識した活動を行うようにしている。
- ・職員室において、前期課程の教員との会話を大切にしている。

４－１．（教職員）

前期課程と後期課程の教職員には小・中学校の文化の違いがあり、お互いを理解し合うことが難しい。



４－２．（「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合）

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。（記述）

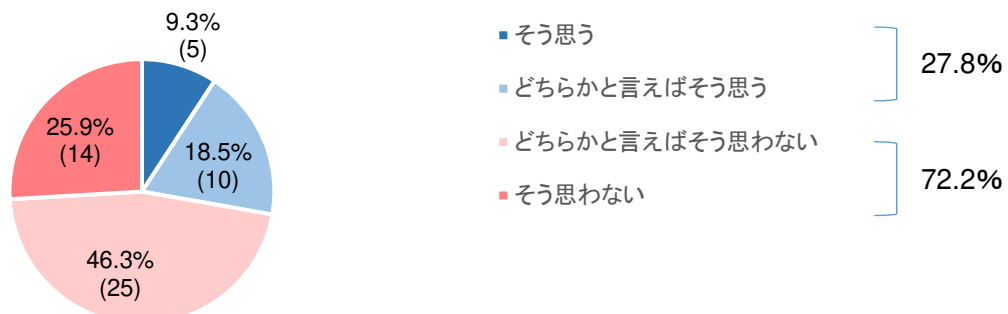
【主な意見】

- ・転勤してきたばかりの最初の職員会議で、文化の違いを職務の中に入れないよう校長先生が説明されている。（創設当初から）
- ・理解し合おうと思いながらの日々だが、根底にあるものまでの理解にはまだ至っていないと感じる。小学校と中学校の文化の違い（生徒指導、教科指導）が大きいため、義務教育学校に突然に入ると慣れるのにも時間がかかり、難しさを感じることは多々ある。慣れてきたころに異動という現実もある。
- ・お互いの不満を聞くこともあるが、話を聞いて調整するよう努力している。

■義務教育学校の難しさ

５－１．（施設）

授業で、体育館や特別教室を使用する際の調整が難しい。



５－２．（「そう思う」・「どちらかと言えばそう思う」を選択した場合）

各校や個人で解決するために取り組んでいることがあれば記載してください。（記述）

【主な意見】

- ・ 時間割表に見える化をし、円滑に調整できるようにしている。
- ・ 担当者が、よく練ったカレンダーを作成している。
- ・ 特別教室予約用のスプレッドシートを活用している。
- ・ コミュニケーションを取って話し合い、互いに譲り合いをする。

■義務教育学校の難しさ

6. その他、義務教育学校の「難しさ」について感じていることがあれば、具体的に記載してください。
(記述)

【主な意見】

指導における難しさ

- ・前期後期で指導の統一が難しい。
- ・小学校の先生が中学校でどのように教科指導したらよいか難しい。
- ・発達段階の違う集団をどの方向に伸ばすのか、意識統一が必要だと感じる。中学生がもう一段階成長するために後期課程での意識改革をどのようにすればよいのかが難しい。
- ・様々な場面で「難しい」と感じる場合、教職員の相互理解と見方や考え方を少し変えるだけで新たな方向性が見つかることが多かった。柔軟な考え方でこども達を育てることが大切だと実感している。
- ・こどもの発達段階を考えると小学校・中学校のやりかたというのがあるのは仕方ないと思う。それを考えながらの調整が難しい。
- ・規律ある雰囲気づくりが前期課程と後期課程で差がある。教員的意思共有が必要だと考える。

児童生徒の姿から感じる難しさ

- ・中だるみをする児童生徒が多くいる。
- ・人間関係が崩れると立て直すきっかけがなかなかない。
- ・長く一緒にいるので、保護者も子どもたちも気持ちの切り替えが難しい。
- ・少人数の義務教育学校は、部活動が持続可能ではない。

合同授業・行事等の難しさ

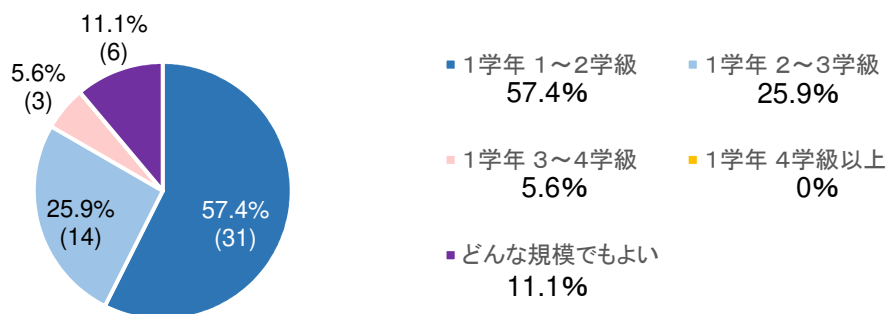
- ・中学生だけであれば簡単に集めて話ができることも、小学生と一緒にいる場合は時程の調整や話す内容をいつもより丁寧に考える必要がある。
- ・前期・後期一緒にやろうとしても実際難しいと感じることがある。
- ・１年生と９年生で体力差がかなりあり、やる事が限定されることもある。
- ・授業の間の休憩が後期課程に合わせているため、大休憩や昼休憩が短く、十分外で遊べる時間が少ない。
- ・担当ではないが、時間割の調整に時間がかかっているように思う。
- ・前期と後期どちらとも立場や気持ちがわかるだけに、どちらにも納得してもらえるように考えて提案をしなければならず、創設以来毎年、ほぼ全ての提案内容を改善したり考え直す作業を繰り返している。これでいけそうだなということが増えてきているが、ここに至るまでに、かなりの労力を要した。
- ・学校行事など様々な活動を通じて異学年の交流や学年の縦割り活動などを行っているが、１年生のような低学年と９年生の学年では発達段階に差があるため、様々な配慮が必要となる。

その他

- ・特に難しさを感じることはない。
- ・児童生徒数に応じた人員体制が必要である。

■義務教育学校の規模

1. 望ましいと考える義務教育学校の規模について、選択してください。（一つのみ）



2. 学校規模について、上記のように考える理由（記述）

【主な意見】

1 学年 1～2 学級

- ・大規模になればなるほど、児童生徒の実態に合った前期課程と後期課程共通の取組を立案・実施することが大変である。
- ・クラス数が多すぎると、リーダー学年が下級生をまとめることが大変になる。
- ・前期高学年が一番育つときに、前期・後期合わせると人数が多いことで、学年に応じた活動や委員会等がやりにくい。活動の場が少なくなり、意欲の減少につながってしまう。
- ・学級が多いと児童生徒との関係が結びにくいと思う。今は、関わりのない学年の生徒でも声をかけることができ、関係をつくることができることもある。
- ・学級数が少ないほうが、異学年での交流が増え、義務教育学校ならではの良さを育むことができる。
- ・児童生徒一人一人に目が届きやすく、教員との関わりも密になる。
- ・少人数の方が9年間の成長をしっかりと見通しながら、児童生徒の実態を踏まえた取組を進めることができる。
- ・こどもたちの人間関係のことを考えると、クラス替えができるくらいの規模がいいと思う。

1 学年 2～3 学級

- ・1学級のみだと9年間環境が変わらないため、2学級程度の小規模校が適当である。個をしっかりと見ることができ、クラス替えで環境も変えられ、児童生徒も切り替えができると思う。
- ・単学級の場合、クラス替えがなく、人間関係の調整や行事に難しさが出るため、2学級以上はあった方がよい。
- ・過去の経験から単学級の学年があると、担任の負担が大きくなる。学年の業務だけでなく単学級イコール学校全体の職員数が少なくなる。
- ・学年間での連携が取りやすい。
- ・規模が大きくなりすぎると、全体的な把握が難しくなり、個々の活躍の場面も制限されてくる。
- ・これ以上だと人数が多すぎて、行事等をするにあたって時間や内容の検討が難しい。

1 学年 3～4 学級

- ・クラス編制における生徒等のバランスを考えると、3学級以上が望ましい。
- ・児童生徒数が多いと教職員の人数も増えるため、仕事を分担して行える。
- ・生徒・保護者ともに人間関係が難しい場合、1～2学級だとどうにもならないことがある。それが9年間続くのはなかなか厳しいものがあると思う。

どんな規模でもよい

- ・運動場や特別教室など、規模に応じて環境が整っていればよいと思う。
- ・人員やシステムなどが整っていれば、どんな規模でも対応できる。

■義務教育学校の規模

3. 学校全体の児童生徒数はどのくらいが望ましいか、ご意見があればお願いします。

(例) 1, 000人を超える規模は大きすぎる など

【主な意見】

- ・ 200～300人
- ・ 全校児童・生徒で500人くらいが最大だと思う。
- ・ 500～600人程度
- ・ 700人くらいまで
- ・ 800人を超えると規模は大きすぎる。
- ・ 前期・後期合わせて800人くらいで、一クラス30人程度であれば全員をしっかりと見ることができると思う。
- ・ 学級数が3と考えて、各学年100人程度、全校900人程度が望ましい。
- ・ 1学年1学級だと一つの家族のような雰囲気、まとまりを感じた。
- ・ 1学年2学級以上はあった方が良く思う。
- ・ 3学級編制できる程度の人数が望ましいのではないかな。